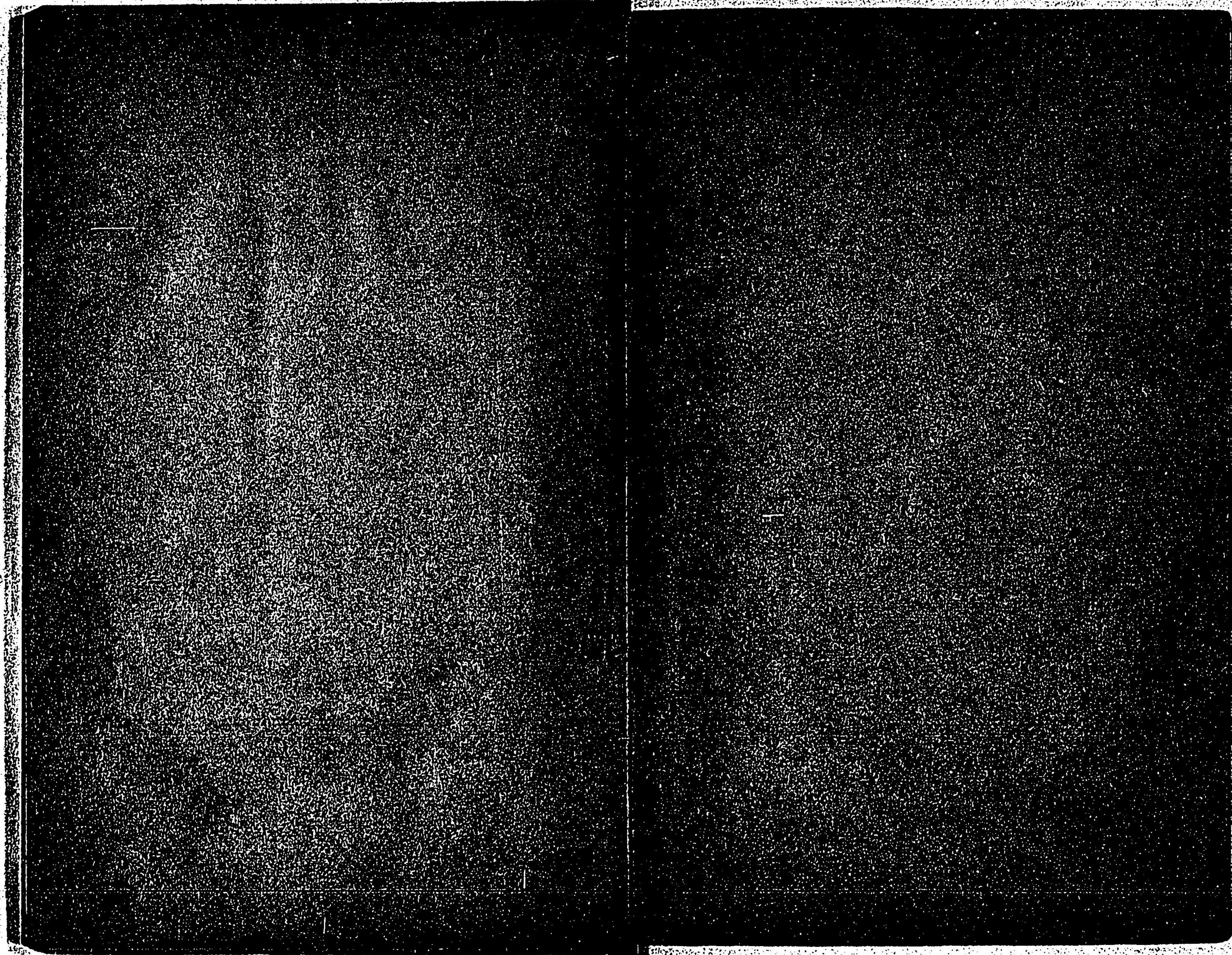


子家

桃水

257

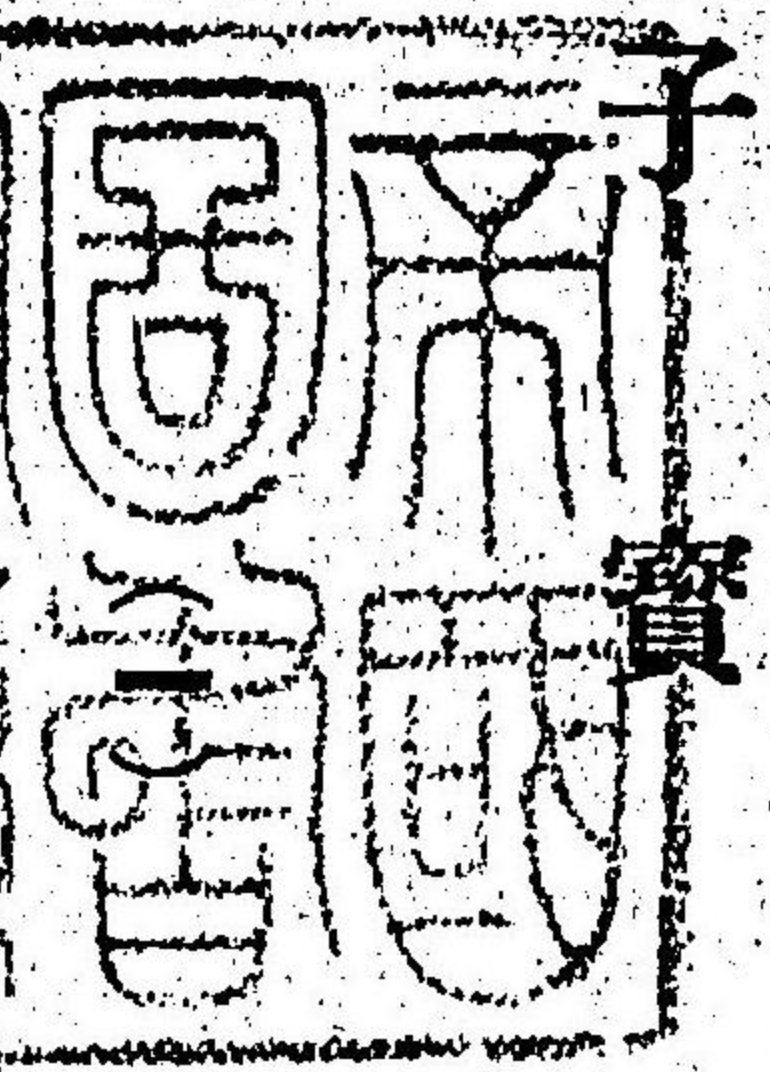
383





特
728

子 寶



桃



其の奥に吹ちさるかと思ふ程の寒風に逆つて、上野公園を急ぎ行く男、年は二十五六、底の
 赤い打帽子の巾色褪はきを深く被り、紺羅紗の毛は大方すり切れて、羊糞色に變つた
 上、處々裂けて居る二重合羽を、片身垂に着た工合、随分見られた状ではない。
 病氣上りか顔も體も、骨と皮ばかりに瘦衰へ、たださへ身巾の廣い二重合羽の前を合さ
 す、逆風に吹開かせ、兩の袖を手に巻いて、胸の邊にかき合せつゝ、少し斜に顔を垂て、東
 照宮の鳥居先まで脇目も觸らず急いだが、漸く立留つて四邊を見廻し、更に我と我が懐中
 を覗き込んで、虹の様な息を吹く。

此の時摺鉢山の麓から、至つて静な靴音が聞え、間もなく角燈の火光が見えた。件の男は

周章狼狽再び前の姿勢を取て、動物園の方へ折れたが、角燈の光も失せ、靴音も遠ざかつた頃、又立留つて懐中を覗き前の通りの息をした。

行ては留まり留まりては行き、其の都度懐中を覗き込んで、火焰のやうな息を吐くこと、前後七八回に及んだが、尙此の邊を行きつ戻りつ、立去る氣色は更になかつた。

忽ちにして懐中から、ぎやーと叫んだ嬰兒の泣き聲。男は非常に狼狽で、道の前後を見廻したが、折悪く向ふから、足早に來る人を認めた。

嬰兒は再び泣きもせず、今急に道を避けては、怪しまれると思つたか、男は何氣なく行違つた。願へりたくてならぬのを、じつと堪へて遙に行過ぎ圖書館の角を廻ると見せて、竊

と後を振向いたが、最早誰も見えぬのである。音樂學校の前を過ぎて、谷中の方へ行く内に、件の男は二度までも寺の門に立寄つて、懐

中の兒を出さうとしたが、何時も泣かれて空しく止んだ。更にまた跡道返して、動物園の

前に來た時、誰やら人の氣配がするので、急に後を振り返ると、正しく先に摺違つた、商人風の男である。鼠色の外套襟深く立た上、白い毛絲の襟巻、外套と同色の、中折れの帽子

まで、少しも違ふ處がないので、扱は跟られたかと思ひながら、故意と此方から話掛た。

「貴君、少々伺ひますが、浅草の方へ參るには、何方の道が宜しいんです」

「浅草、此の先の阪を下りて、汽車の踏み切りをお越えになると、直電車の道に出ます、

其の線路を傳つて行くと、獨手に浅草の觀音へ行かれます」

「何うも有難う」

「浅草へお越しになるなら、御一緒に參りませう」

「ナニまだ外に廻り道もありますから」

勿々に別れを告げて、今度は清水の方へ急ぎ、折々立留つては後を振向き、また懐中を覗き込んでホーホッと太息した。

耳尻から撞出す鐘、數へて見ればもう十二時。男は懷中に手をさし入れて、小兒の脇に加へながら、血走る眼を瞞いて、さよらくと四邊を見廻し、殆んど狂氣の狀であつたが、

此の時不意に樹影から顯はれ出た獲の男。

「モン貴君、まだ浅草の方へお歸りにはなりませんか」

一度ならず二度ならず、三度までも驚かした、渠何者ぞと、不審さうに見上げ見下しつゝ、頻りに懷中を氣にする容子。

「貴君、嗚私を訝しな奴だと、思つてお出なさいませうが、別に怪しい者ぢやア御座い
ません、私は廣小路で、洋服裁縫を致します、澤田と申す者、別に金があるといふ程の、
商人でも御座いませぬが、マア、職人の四五人も使つて、何うか斯うか不自由なく、暮
して行く事も出来さうですが、唯一つ不足なのは、子といふものを持ちません、私は恰度四
十、家内は三十五になります。夫婦になつて十五年、二人とも至極壯健で、滅多に風も胃
ませんが、夫で子供のないのは不思議、何處かに病氣があるだらうと、實は夫婦とも大學病
院へ行つて、診察を受けましたが、別段悪い處もない、此體格で小兒のないのは、餘程變だ
とお醫師さまも、仰しやる位で御座いました。夫からでも五六年、やれ温泉に行くが好
い、斯ういふ藥を呑むが好い、それお灸だお呪咀だとあらゆる手段を盡ししても、何し

(二)

たものか子は出来ません、是といふのも全く子罰、へエ飛だ愚痴で御座いますが、萬望貴
君お聞き下さい、實は今から十年前、まだ横濱に居つた頃、一人小兒を産ました、而も立
派な男の子を産したんで御座いますが、枕直しも濟ぬ中、ツイ隣から火事を出されて、夫
婦親子が生命だけは漸との事助かりましたも、店をそつくり焼て仕舞て、残つたものは借
金ばかり、加之に産婦は煩ひ付て、死ぬか生るかといふ騒ぎ、所詮男の手一つで、何せう
様も御座いませぬから、火事で子供は死たと偽り、實は或晩山の手へ、す、捨てたんで御座
います……、恰ど其の晩も今夜の様に、雪を合た空模様、斯んな處へ捨て置いたら、凍死
をするかも知れぬ、彼んな處へ捨てたなら、車に曳かれる事はないか萬望情ある人に拾はれ
てくれろ、無慈悲な親を恨むまいぞと、捨ては拾ひ拾ふては泣き、拾かねた時の事を今思
ひ出してさへ腸も寸断れる心地、其の後は何なつたか、生死も知れぬ我子の行方を、片
時忘れる暇もなく、今夜谷中の鬼子母神へお参りをした歸途も、ア、恰ど斯んな晩だつた
と、思ひ出して居ます處に、それ其の貴君の懷中から、可愛らしいお子の泣き聲、私は人
様の、懷中から聞えたと思ふ事は出来ませぬで、實は先刻から貴君のお跡を、跟て居たん

六
で御座います、申出すのも失禮ながら、若しその懐中のお子さんを私の様なものに、下さる事が出来ませうなら、十年前に失ひました、實の我子と思ひまして、夫婦の者が心の限り、大事にかけ育てます、如何なもので御座いませうな」
偶像のやうに突立て、殆んど呼吸も吻かす聞て居た男は、此の時例の太息して、二三歩つかく進出た。

「イヤ何も恐入つた、其のお話を窺つては、實に汗顔の至りです、畢竟我輩も已むを得ぬ事情から、我子を捨やうと決心しました、此の決心をするまでには、何程胸を痛めたか、願はくはお察し下さい、覺のある貴君に對して、くだくは述立しません、殊に此の子を貰つて遣らうと、御親切なお言葉、何とお禮の申し様もありません、此の子の爲にも意外の幸福、願つてもない事ですが、如何せん此の子は女で、貴君の御希望に副ひますまい」

「ナニもう女のお子さんでも、私どもは厭ひません」

「エ、女でお差支ありませんか、ア、有難い」

熱い涙をばらばらと溢し、頓て懐中の子を取れば、此方も外套のぼたん外して。

「サア〜是に頂ませう」

(三)

下谷御徒士町の或路次を入ると、兩側に十軒ばかりづつ、立並んだ貸長家がある。其の入口の右側の軒洋燈には、産婆野島かめと記し、格子の横には、秘密貸金取次所といふ看板が掛つて居る。

此の家の奥の四疊半に、煎餅のやうな損料蒲團を布き、箆の先で炭團の灰をかき落しつゝ、端の取れた箱火鉢に、白魚のやうな手を翳し、人待顔に見ゆる女は、年十八か精々十九、更紗縮緬の下着に絲織の上着、病中と見えて髪は亂れ、顔も容も衰れて居るが、何處其處品格備はつて、斯る裏店住居すべき、人物とは受取られぬ。
折から格子戸引明けて。

「お婆さん、もう締ても好ですか」

此の聲を聞付けた女

「まだお婆さんはお歸りになりません」

晴間もなく降霑いた涙拭ふて居直る時、足早に入つて來たのは、藝に上野公園を彷徨て居

た男。

「あれ貴君」

女は黄い聲をして、男の懷中を差覗いた。

「ア、寒い、とうとう雪になつた様だ」

男は胸から上でもつて、冷たい火鉢を蔽ひながら、凡そ十分間ばかり顔も見せず口も吐す

じつと火鉢を抱締めた。

「貴君、嬰兒を何うなすつて」

片崩れした炭圍の火に一滴の涙漑いで。

「光子さん、我々は幸福です、嬰兒は尙幸福です」

「エ、彼の兒は何うなすつたんです」

「マアお待ちなさい、今委しくお話し、ます」

男は例の羊羹色の、二重合羽を刎退けて、女の前に儼然居直り。

「光子さん、今改めてお話するでもないが、貴嬢のお父さんと僕の親父は、兄弟よりも親

しくて、維新前後殆んど死生を共にされたといふ事は、毎度話に聞いて居たです、然るに

僕の両親は早死をして、僕は國許に居る、兄の手に育てられたが、五年前貴嬢のお父さん

は、貴嬢を伴ふて墓參の爲め、國へお歸りになつた時、僕の宅へお出になつて、昌介と娘

光子は、是非夫婦にする約束、尋常中學を卒業したら、早速東京に上つて來い、私の方で

引受けて何んな學問でもさせて遣る、私は今東京でも、二三の指に折られる程の、資産家

になつて居るが、原を糺せが汝の父さんが、盡力をしてくれた結果で、半分は分ても好の

だ、併し學問を仕遂げぬ前に、金がある資力があると、油断をしては爲にならん、先づ學

問を仕上るまでは、私が金を預かつて、修業に要する分だけを、貢いで遣ると仰しやつた

事は、貴嬢も聞いて居られたでせう、僕の兄は田舎醫師で收入の少い上、子供ばかり澤山

あつて、到底僕に中學以上の學問させる力はないです、處へ貴嬢のお父さんから、其のお

話を下すつた時は、實に嬉しう感じました、僕も一個の男子です、貴嬢のお父さんの財産を故なく分て頂かう杯と、そんな鄙劣な蟲の好い精神は持ません、唯成業をするまでの處貨費を願へば充分です、僕は夫から勵みが付き、日夜非常な勉強をして、尋常中學を卒るや否や直に上京しましたが、實に僕は非運です、貴嬢のお父さんは着京の前日腦充血で死去された……光子さんは悲歎の中から、熱情を傾けて、僕の上京を喜んで下さつたが、貴嬢のお母さんにお兄上さんは何です、僕を殆ど乞兒のやうに、冷遇されたぢやありませんか、或場合は盜賊として、虐待されたぢやありませんか、實際、僕は桑田家に對する惡意をもつて、光子さんを愛したですが、今は光子さんに對する好意をもつて、斷然離縁やうと決心しました』

(四)

一句一句鼓膜を抉るかと思ふ程の、鋭い調子で述べたが、女は夫すら感せぬかの如く。「貴君、嬰兒を何うなすつて」と同じ問を繰返す。

男はぐつと一つ睨んで。

「マア好くお聞きなさい」
聲を勵まして叱り付け、更に二つ三つ呼吸を交して。

「必らず小兒の事に就て、貴嬢は心配せんでも宜しい、夫より僕の言ふ事を、何うか好く聞いて下さい、ねへ光子さん、僕はお父さんの忌の明くまで、近所の下宿屋に泊つて居て折々お宅へ伺ひました、然るにお母さんもお兄上さんも、なか／＼お對面下さらんで、後には僕の影を見ると、車夫や馬丁も乞兒同様、僕を罵りつて追出したです、併し僕は何でもして、相續人たる健三君に、一度お目に掛つた上、お父さんのお話を、委しく申述たいと思つて、一夜竊に御門内へ、忍び入らうとする處を、お母さんの甥に當る、菅井長四郎が認めて、僕を盜賊と罵りつた末、遂に巡査に引渡した、僕如何にしても憤懣に堪へんから、警察へ行つ時、署長に委しい事情を述て、是非桑田健三に、逢はして貰ひたいと願つたから、健三君も己むを得ず、僕に逢ふ事を承諾された、僕お兄上さんにお目に掛けて、いろ／＼お話をした上、僕は御尊父のお言葉に甘へて、過分の幸榮を望む心は、聊かもあり

「二
 ません、唯高等學校を経て大學を卒業するまで、學費を貸して頂きたい、成業の上は相當の方法をもつて、必ずお返し申しますと、熱心にお願ひしたが、貴嬢のお兄上さんは冷酷極まる、頭腦をもつて居る方で、親父が何んなお話をしたか、君のお父さんと何ういふ深い、交際を結んだか、私は一向に知らない、夫ゆゑ折角のお話だが、先づ御免蒙らう、イヤもう親父が死ぬといふと、遂に聞いた事もない人が、親友でもあつたかの様に、見舞に來たり會葬したり、今君の言つた様な事も、幾口か迫つて來たが、何れも同様に断つた、私等も死んだ後には、生前曾て見た事も、聞いた事もない親友が、さまざまな面倒を、遺族に持込む事だらうと、僕をさも騙だと、言はんばかりの挨拶でした、僕餘り無念だから證人をお呼下さい、光子さんは御存じですといふと、お母さんが次の間から、例の通り眞白に塗り立た顔を出して、光子に私から尋ねても、そんな事はないと言ひます、ハイ娘は少しも存じませよんと、腮突出された憎らしさ、扱は母子兄妹とも、健吉殿の遺言を、反古にする了簡か、飛んだ恥を掻きに來たと、頻りに後悔したもの、僕が桑田の婿になる事は、故郷でも名高い評判で、誰知らぬ者もないのに、今更おめく歸られもせず、と言

つて便る先はなし、進退谷まつた處から、僕は實際悪意を起して、是非桑田家に仇をした
 と言ふ、考へになつたのです、貴嬢のお兄上さんといふ方は、唯慾のある事を知つて世
 間の義理人情も、一向辨へない方です、また織母さんは自分の物、菅井長四郎を婿にして
 お父さんから光子さんに、譲られてある財産を、手に入れたといふ希望です、僕は之を
 妨げて、光子さんを奪ふのが、桑田家に苦痛を與へる、最も適切な手段と信じて、去年の
 正月光子さんが、隣邸の歌がるたに招かれて、十二時頃女中と二人、歸られる處を跟
 て、突然光子さんを引つ捉へ、下宿屋へ伴つて、段々話をして見ると、自分は全くお母さ
 んや、兄さんに欺された、貴郎はお父さんの葬式に來た儘、自宅へは一度もお出がない、
 聞ば國から女を連れて、逃出したといふ噂、所詮自家の婿になる考へはないといふ、兄さま
 の話を聞いて、恨んで居たとは意外な話、けれども僕は信用しないで、とうとう貴嬢と縁を
 結んだ」

「私の心は貴郎にも分つて居るぢやありませんか、夫を今更改めて仰しやらないでも好
 でせう、私は彼の兒が氣に掛ります」

「マア少しお待ちなさい、順序を立てて話するから」

(五)

「今も御話しする通り、貴嬢と縁を結んだのは、全く戀愛の結果でなくて、桑田家に對する、僕の悪意に起つたことです、僕は貴嬢のお母さんや、お兄上さんを困らす爲め、何答も恨もない、光子さんを犠牲にした、當時僕は何故あゝまで残忍な心になつたか、今考へても分らんです、恐らく僕は憤慨の餘り、一時發狂したのでせう」

女は男の顔を眺めて、殆んど獨語のやうに。

「あれマア何を仰しやるんだらう」

「イヤ全く發狂としか思はれません、假令お父さまのお言葉があつたにもせよ、學問も出來ず、資産もなく、到底人間並の世渡りをする事のない僕が、教育もあり資産もあり、何んな立派な良人でも、持つことの出来る貴嬢を、妻にするとは以ての外です、第一お母さんやお兄上さんが、承知せられる筈はない、萬が一承知されても、所謂釣合は不

縁の原で、末遂げることは出來ないです、好しまだ無理に添ひ送つて見た處が、お互ひ決して幸福を、享ける譯には行かんです、僕は實に後悔しました、僕が復讐の念をもつて、残忍極まる悪意を以て、犠牲にしたにも拘はらず、貴嬢は無邪氣な心を以て、高崇な愛をもつて始終僕に報はれた、貴嬢は非常な辛苦を嘗て、お母さんやお兄上さんの、心を翻へさうと力められた、僕は貴嬢の心に恥て、深く自身の所業を悔ひ、貴嬢を捨てやうと決心しました、マアお聞きなさい、男が女を捨てると言へば、普通悪意に違ひないが、僕の貴嬢を捨てると言ふのは、非常な好意から起ることです、好く考へて御覽なさい、僕が皮相の愛に迷ふて、此儘貴嬢を妻にすれば、飽までお母さんやお兄上さんに背き、無論桑田家とは絶交です、日本で有数の金満家、桑田家の令嬢が、持つて生れた幸福を擲ち、學問もない資力もない、好く行て小使か、職工にしかなれない者の、妻となつて何うします、僕は此上附纏つて、光子さんを苦しめ、桑田家に仇をする程、残忍な者でもありません、ア、好事をした、是で気分が晴々したと、愉快に思つたのは僅かの間で、直に發狂は覺掛りました、處で貴嬢は懐胎になつた、此の儘で家に居ては、何んな目に逢ふかも知れない、連て逃下貴

ひたいと、お話を聞いた時は、僕も愈驚いたが、萬已むを得ないから、光子さんの望みに任して、五ヶ月間斯んな處に、二人で潜伏する中も、僕は日夜考へを練り、いろいろ善後策を講じたです、が、何う思案して見ても、貴嬢を捨てるといふ事の外、貴嬢に酬ゆる良法はない、桑田家が何處までも、光子さんを捨ない證據は、今に逃亡した事を堅く世間に秘してあります、少し體が悪いので、別荘に出掛たと、言ふ事になつて居るです、付いては先づ別荘に行た上、お母さんやお兄さんに、詫の手紙をお出しなさい、サア夫は否だらう、けれども一度過れば、此後非常な幸福です、過去の事は總て夢です、僕は今日限り忘れます、貴嬢も萬望忘れて下さい、僕は此の事を決行する爲め、夫婦の中のかすがひを、先づ捨る氣になつたです』

湧いて出る涙堰かねたか、袖を喫でつツ伏した。

(六)

「貴郎何を捨る氣におんなすつて」
「子を捨る氣になつたです」
「エ、子を捨る、貴郎何を仰しやるんです、マア怖ろしい、何だつてそんな事が出来ませう、何だつて貴郎」
「實に怖ろしい所業です」
「貴郎嬰兒を何うなすつたんです」
「マア氣を静めてお聞なさい、僕も人間です、子の可愛いと言ふ事を、知らんではないです、寧ろ知り過として居るかも知れない、殊に我々を父母として、今日の場合に生れた子供は、明かな夫婦の中に生れた子より不便も増し、可愛う思ふは知れた事です、而も僕は法律に背き人道を忘れ、忍び難きを忍んで、子を捨やうと決心しました、實に人間も或場合には、怖い心になるものです、世に鬼といふ者があるなら、僕は即ち鬼でせう、けれども今日子を捨るのは、所業こそ鬼であつても、心は全く佛です、夫に引換へ光子さんを、僕の手に入れた時は、心までが鬼でした」

「貴郎眞實嬰兒を、捨てお仕舞なすつたの」

今や光子は悲しみの絶頂に達し、泣くに涙も出ず恨言ふ辭さへ打忘れ、殆んど絶え入るかと思はれた、男は女の手を捉へて、二つ三つ揺動かし。

「光子さん、確乎して下さい、ヨ一お願だから、僕は嬰兒を捨て、貴嬢と断然縁を切りたい、此の上貴嬢の幸福を、妨げまいと決したのです、實に腹が立ませうが二人の中に出來た子を、断りもなく捨てるやうな、怖ろしい鬼と思つて、萬望縁を切つて下さい、僕は鬼です毒蛇です、僕に捨られた貴嬢は素より、嬰兒も幸福です」

光子は左の手をもつて、力一杯額を押へ、暫く氣を養ふた末、漸と泣だけの力に復した。

「貴郎はほんとうに酷い方です、良人に捨られた妻や、親に捨られた兒が、何だつて幸福でせう、母や兄が何と申しても、私は正しく貴郎の妻です、何んな難儀を致しても、夫婦親子睦まじう、暮したいのが願です」

「それ其の心に僕は恥て、悪意を翻へす氣になつたです」

「貴郎は何も私に向つて、悪い事をなすつた事は御座いません」

「サア其の心に愈恥て、貴嬢に別れる事を決したです、若し光子さんが僕を見て、悪鬼毒蛇と思つて居たなら、僕はまだ一附纏ひ、貴嬢を苦しめたかも知れんのです、然るに貴嬢は善良な、良人として僕を遇した、僕は恨が晴ると同時に、貴嬢を憐む心が起つて、全く前非を悔悟したです貴嬢は眞實僕を愛し、位置も資産も擲つて、更に惜いと思はんでせうが、僕は貴嬢を小使や職工位の妻として、眺めるに忍びんです、別れて下さい、僕の乞ひを容れて下さい、僕が犯した罪を許し、安心させうと言ふ情があるなら、僕の願を聞いて下さい、僕は堅く決心しました、其決心を示す爲、涙を揮つて子を捨てたです、夫とも貴嬢が聞入なければ、僕生命を捨てませう、何うです光子さん」

「分りました、貴郎のお心は好く分りました、貴郎は私と縁を切つて、位地もあり學問もある、立派な人の妻にすれば、夫で私は幸福だと、一途に思つて居らつしやる、ねへ左様でせう、夫が大變な誤解です、私は父の遺言に背き、子まで出來た良人に別れて、此先何んな幸福に逢つても、嬉しいとは思ひません、幸福に逢へば逢ふ程、私は苦痛を感じます貴郎が思つて居らつしやる程、私は好衣服や旨い物を、欲しがる女ぢやアありません、樂

い心さへ持つて居れば、少々寒くても空腹でも、私は何とも思ひません、夫とも今から妻
子を持つては、學問をする邪魔になる、是非とも立派な身分になつて、桑田の繼母や兄の
顔を、見返したいといふお心なら、私は末を樂みに、五年でも十年でも、屹度辛抱して居
ます、ねへ貴郎、左様いふ事にして頂戴な、私だつて自分の良人を意氣地なしの乞食書生
と、繼母や兄に言はれた事は、假令死んでも忘れません、貴郎が立派な人にお成りになつ
て、桑田の繼母や兄の口から、唯一言悪かつたといふ挨拶を聞さへすれば、其の場で死んで
も本望です、ねへ貴郎」

(七)

「お婆アさんですか、まだ鍵は掛て居ません、ハテな、左様ぢやアなかつたのか」
男は豆洋燈をもつて忙はしく玄關へ驅出した。

「何誰」

格子戸をがらりと明けて、無作法に飛込んだのは、馬丁と見える男。

「オイ碧海さん、お嬢さまを何うしたんだ」

「ム、汝は桑田さんの馬丁だな」

「左様よ、馬丁の東吉だ」

此時ぬつと這入つて來たのは、立派な洋服打扮の紳士、碧海が顔をじろりと見た儘、馬丁が
前に足突出して靴を脱がせ。

「東吉安内せい、儘かに光子は居る筈だ」

男は面目なげに頭を下て。

「桑田さん、實に何ともお断りの申様はありません、光子さんはお出で、僕御案内申
します」

言ひつゝ、先に立つて導けば、外套も脱がすづかゝと、奥の四疊半に進み入つた紳士、驚
き惑ふ光子を睨んで、突立た儘嘲笑ひ。

「光子、一體は何の狀だ、マア今此處で夫等の事を、問ひ糺さんでも宜しい、兎に角私

が連れて歸る、サア早くお出

矢庭に執る手を振拂ひ。

「兄様、私はお母さまや、貴君のお心に背きまして、一旦家出致したからは、再び邸へ歸りません、光子は死で仕舞つたものと、思召て頂きますせう」

「馬鹿な事を言つては不可、現在生て居る者を、死だと思ふ事が出来るものか、汝も少しは身分を知れ、エ、桑田健三の妹ではないか、夫に何だ此有様は、貧民の巢窟とも言ふべき處に潜伏して、サア一所にお歸り、自分の家へ歸られんといふ譯はない」

「イーエ私 は桑田の邸を、自分の家とは存じません」

「ハア、不思議な事を聞くものだ、而して汝の家は何處だ」

「私はお父様の仰しやり置いた通り、碧海さんの處へ参ります」

「お父さまが何を仰しやつたね」

「五年前にお父様が私をお連れになつて、國許へお歸りの時、碧海さんへお話のあつた事は、御歸京の上兄さまにも、直仰しやつたぢやア御座いませんか」

「怪しからん、私は聞いた覺がない」

「イーエ仰つしやつたに違御座いません」

「マア夫等の事を、此處で争ふ必要はない、何しろ一旦邸にお歸り」

「私 は歸りません」

兄妹の争ひ聞兼て、碧海昌介は中に入り。

「光子さん、萬望お兄上さんの仰しやる通り、貴嬢はお邸へお歸り下さい、ねへ、是非左様して頂きたい」

光子は兄の健三に向ひ。

「私 は碧海さんと、少しお話したい事が御座います、其上で歸るとも歸らぬとも、御返事を致しませう」

「夫は不可、餘處の娘を誘かして、逃亡をする様な、怪しからん人物は、此上何んな悪智恵を、吹き込むかも料られない」

「兄様、私 は碧海さんに誘かされて、逃たんぢやア御座いません」

「左様言へど致へられたか、若し尋常の人間なら、假令女が何と言つても、不心得のない様に、説諭をせねばならぬのだ」

碧海昌介は面目なげに。

「全く貴君のお察し通り、光子さんに咎はないです、今までの事は徹頭徹尾、碧海昌介一人の罪です」

光子は恨めしさうに男を眺めて。

「貴郎、まだ私の申した事が、お分りになりませんか、私のお願ひ申した事を、お聞入れは下さいませんか」

桑田健三は馬丁の東吉を顧へり。

「東吉、手を貸せ、永く話させて居る内には、何な悪悪智を付られるかも知れん」

泣狂ふ光子が手を捉り、無理無體に引摺て、格子の外に連出した時、腸を絞るやうな、悲憤の聲を振立て。

「私に此な目に逢つても、貴郎悔しくはないんですか、不便と思つて下さるなら、先刻

私の願つた通り……」

此の聲を聞いた時は、碧海昌介堪えかねたか、格子の外に轉び出て。

「光子さん、宜しい、受合た、屹度貴嬢の希望に従う、僕も男だ」

桑田健三は馬丁に命じ光子が口に手拭をもつて、猿轡を啣ませた。

(八)

憐むべき光子は、猿轡の儘人力車に抱載せられ、馬丁の東吉は母衣引卸すや否や、棍棒擧げて曳出した。

車は向島にある桑田家の別荘に曳付けられた。此の頃は番人の外、住む者もなく、母家はべ切りの筈であるのに、大門の扉は左右に開かれ、座敷の障子には、洋燈の光が映じて居る、東吉は玄關に車を曳付け、大聲に。

「お歸りー」

母衣を刎ね猿轡を取り、殆んど半死半生の、光子の帯と手を捉て玄關に扶卸す時、慌しく

出迎へたのは、光子が継母伸子と、甥の菅井長四郎である。

伸子は五十二三、體格肥満して色赤黒く、總ての點が男作りに出來て居る、其の癖非常の派出好み、禿た頭を黒々と塗り立、生得の角な額に、富士形の際を書いた容子、滑稽と言ふより寧ろ凄くて、一見身の毛も竦立つ程の相貌、是に反して甥長四郎は、瘦形で身すらりと高く、地體色の白い上に薄化粧をすると言へば、宛がら元の俳優の姐形で坐作進退言葉遣ひも、なま胸の悪い程艶かしい、年は二十五六であらう。

「オヤお歸りか、東吉御苦勞だつたね、且那は跡から、左様、サア早く此方へお出、オヤマア大層瘦衰へて……、可愛さうに、嘸か！苦勞をしたんだらう……、叱咤も何にも言やアしないよ、長四郎手を取つてお遣り」

女義大夫の古手らしい聲を、故意に優しうして、さまざま光子を慰めた。

「サア光子さん、そんな處に居て、冷ると身體に悪い事よ、私手を引いて上やう、庶敷には火燵もあつてよ」

平生開馴て居る東吉ですら、失笑す程の氣取様。香水の薫をふんとさして、立寄つた長四

郎に手を捉られるが否さ、光子は我を力めて立ち、二個のお化に伴はれて、奥座敷へ歩を運んだ。

「マア〜衣服も代なしになつて居る、早く清潔したのと着換てお仕舞ひ、髪も大層亂れて居るが、明日美禰を呼んで結はせませう、ほんとうに汝の事に付いては、私何んなに心配したか知れない、だけれども汝が乞兒書生に、勾拐されたと言ふものなら汝の身體に疵も付くし、第一桑田家の恥辱だから、光子は少し身體が悪くて、養生の爲別荘に遣りましたと、世間の方には觸れてあります、中には何處の御別荘へお出になつた、お見舞に伺はねば濟まないなどと言ふ方もあつて、随分返答に困つたが、まだ誰も眞實の事を感付た者はないから汝も其の積で居れば好い、病氣なら大威張りで、早速お醫師を頼みませう、何にしも寒さうだねへ、かたくりでも呑んで、暖まつた方が好からう、而して今夜は早くお休み、ヨ〜光子さん」

「何にも頂きたくは御座いません」
是が光子の初音であつた。

程なく健三も歸つて来た。

「マア〜 嘸寒かつたでせう、直にお酒を上やうねへ」

「頂きませう、何うも非常に寒かつた」

「だけでも汝の御心配で、無事に光子さんが歸つて来て、斯んな嬉しい事はありません、

乞食書生は何うしました」

「彼は實に不埒な奴です、大方今後は乞食をするか、盜賊でも働いでせう」

母と兄とが此問答は、いよく光子を激せしめた、光子は今にも破裂しそうな、心臓の鼓

動を押へて、兄健三に打向ひ。

「兄様、私は今一度、是非彼の方にお逢ひ申して、お話ししたい事が御座います」

「彼の方、フン誰だ」

「碧海さんで御座います」

「彼な奴に何の用がある、もう好加減にして置なさい」

「イーエ 私は今一度、逢はなくちやアなりません」

「夫は不可、断じて不可よ」
「唯つた一言聞たい事が御座います」
「手紙で問ふて遣れば宜しい、永く彼な馬鹿者の相手になると、桑田の名譽に關するからなア」

(九)

光子は漲る涙を拂つて。

「母様でも兄様でも一途に彼の碧海さんを、悪い方の様に仰しやいますが、夫は大變な間違ひで御座います」

健三は母及長四郎と酒酌み交しながら、

「左様かね、餘處の娘を親兄弟に、一言の断りもなく、勾拐す奴が好人間か、是は頗る珍説だ」

冷笑をもつて酬ひたから、光子は愈急込んで。

「私は勾引されたんぢやア御座いません、先年お父様が私を連れて、お故郷へお歸り遊ばした時、碧海さんの宅へお越しになつて、お兄上さん御夫婦の前で、私は此方のお父さんと、兄弟よりも親しくて、維新前後はお互ひに、助けられたり助けたり、艱難辛苦を共にしました、今日私が紳士とか紳商とか言はれるのも、畢竟お父さんのお蔭です、其上昌介さんと光子とは、是非夫婦にしたいと言つて、約束をして置いた事は、無論皆さんも御承知でせう私も忘れる筈はない、始終心に掛つて居ながら、まだ骨も固まつて居ないものを、早く東京に呼寄せるのは、餘り望ましい事でないから、故意今日まで便りもせず打捨て置きました、今度久々で郷里に歸つて、昌介さんの評判を聞き、實に私も喜ばしい尋常中學を卒業したら、早速東京にお出下さい、夫からは私の方へ引取つて、何でも當人の望み次第、學問をさせた上、財産を半分分けて、光子と夫婦にしますと言つて、堅くお約束なすつたんです、お父様はお歸りになつた晩、母様や兄様にも、お話し遊ばしたぢやア御座いませんか、其の後はお父様から、手紙をお出しになつた事も、其の返辭の參つた事も、好く御存じで御座いませう、夫で碧海さんは、尋常中學を卒るが早い、御上京に

なりましたものを、如何にお父様が居らつしやらないと言つて、酷たらしいお扱、責て彼方が大學校を、卒業なさるまでの處、學費をお出し下さる様、いく度お願ひ申しても、乞兒書生の意氣地なしのと、酷い事はつかり仰しやつて、門の内にも入れないやうに、お仕向けになつたのが、餘りお氣の毒で御座いますから私だけは何處までもお父様の御遺言を守り、一處に難儀を致す心で、碧海さんの處へ參りました、勾引されたんでは御座いません」

「ハ、ハ、ハ、假令汝が何と言つても、現在彼奴は私に向つて、何事も自分が悪い、汝に罪はないと言つた」

「夫は私を庇蔭う爲に、左様仰しやつたんで御座います」

「マア左様事は何うでも宜しい、兎に角私はお父様から、彼な奴を養つてやれと言付かつた覚えはない、成る程碧海の俸を呼んで、世話をして遣りたいとか、光子の婿にする積だとか、日外お話もあつた様だが、また其後私に對して、彼は言つて置いたもの、何んな人間か知れぬ奴を、迂濶世話する譯にも行まい、篤と取調て見るやうにと、お話があつたか

ら、私は同郷人に就て、充分様子を探つて見ると、イヤもう意氣地なしの役立たず、到底今日の世の中には、間に合はん人物で、彼等が爲に一文でも、費すのは無益の至り、況んや大切な妹の婿にするのは否だから、斷然構ひ付けぬ事にした、畢竟家の爲汝の爲を思つての事なんだ、夫を悪く考へては罰が當るせ」

「イーエ 私は悪く思ひます、お父様は何處までも、碧海さんとの約束を、お守りになる思召、迂濶世話は出来ないなぞと、仰しやる筈は御座いません」

繼母は猪口を呑干して、健三に屬しながら。

「光子さん、汝何を言ふんです、其のお話は此の母も、お父様に伺ひました、ハイ私が體かな證人です、何だねへ、兄さまに口返答をして、お父様がお死亡になつて見ると、今から先は何んな事でも、兄さまの仰しやる通り、従はななくちやアなりません、何だねへ詰らない、意氣地なしの乞兒書生に、義理もへちまもあつたものかね」

(十)

光子が要求は堅く拒まれて、遂に碧海昌介と、再び逢ふ事は出来なしたのである。

繼母伸子も兄健三も、碧海との關係に付いては、随分光子に逆らつて、手厳しく争つたが、其の後は何うでもして、光子が心を和らげたい、慰めたいと骨折つた。彼等が偽の親切をもつて、偏に光子を手懐け、碧海が事を思ひ切らせて、自分等權力の下に服させやうといふ心は、鼻の先におら下つて居る。光子は斯んな手に乗つて、氣持好く思ふ程、淺墓な女ではない、寧ろ非常に不快を感じた。

光子が機嫌取の第一着に、氣に入の女中美禰といふのは、本邸から呼寄せられた。

今日も美禰は光子の髪を結ながら。

「お嬢様、實に私は何の位、お案じ申したか知れませんが、而して貴嬢は一跡何處に、お居で遊ばしたので御座います」

「下谷御徒士町といつて、随分殿い處だつたよ」

「碧海さんとお二人で世帯をお持ち遊ばして、居らしたんで御座いますか」

「ナニね、餘處の家の座敷を借て」

「夫ぢやア貴嬢下宿して居らつしやいましたの、碧海さんは何遊ばしたんで御座います」
「それが分らないから、私は實に心配なのよ」

「日外大旦那様が、貴嬢と御一緒に、お故郷へお歸り遊ばした時、碧海さんとお許嫁のあつた事は、大旦那様から私でさへ、承つて居ますもの、夫人さまや若旦那様の、御存じない筈は御座いませぬ」

「慥かに御存じの筈なのに、知らないと言ふのは、夫もお母様や兄様が、お氣に入らないといふ事なら、改めて許嫁の約束を、破談に遊ばした處が、是非貴はうとも仰しやるまいし、是非嫁きたいと言やアしないが、現在お父様がお申遣になつた事を、聞かないと仰しやる上、碧海さんが大學校を、卒業するまでの間、學費を貸して頂きたい、卒業の後には何でもして、貲度お返し申しますといろ／＼お頼みになつたのを、學費處が一錢でも、用立てる事は出来ない、實に酷い御挨拶、夫からは碧海さんが、お父様の七日々々、焼香にお出になつても、乞食書生は門の内へいれるなと仰しやつて、残酷なお扱、私は死にお父様に對しても、お母様や兄様と、同じ心になられないから、碧海さんに身を任せ、同

じ様に難儀をしたいと、思ひ詰て家を出たのさ、だから私は此事に付、世間で何と言はれても、少しも恥る心はないのよ」

「世間で何と申す事が出来ませう、其上お邸では、御病氣御養生のため、別荘へ行らしたと、申觸らして御座いますから、誰も眞實の事は存じません、何に致せ碧海さんも、貴嬢にお別れ遊ばして、嘸御残念で御座いませうが、もう愈お手切と極つたんで御座いませすか」

「兄様が馬丁の東吉を連れて来て、突然私を引捉へ、言ひたい事も言はさないで、車の上に縛り付け、無理にお連歸りになつたんだから、跡で何んなお話があつたか……、何にしでも私はモ一度、碧海さんにお逢ひ申して、お話したい事があるが、お母様や兄様にいろ／＼お願ひ申したも、お聞入れ下さらない」

「何う致して貴姐、お聞遊ばすもので御座いますか、貴嬢がお逃になりやアしないか、碧海さんが竊そりと、お越しにならうも知れないと言ふんで、夫は／＼大變な御用心、所詮當分碧海さんに、お逢ひ遊ばす事は出来ませぬ」

光子は涙の顔を抑へて、暫くの間無言であつたが、頓て後を振向いて、
「美禰、私はちつと折入つて、汝に頼みたい事がある」

(十一)

美禰は慌しく居直つて。

「私に御用、ヘイ、何でも承ひます」

光子は四邊を見廻して。

「誰も居やアしないかね」

「今なら大丈夫で御座います、夫人は左官屋にへんき屋の真最中、でれ助は淺草まで、買物に行くと申て、今の前出掛ました」

「左様、夫ぢやア恰と好い、外でもないが私は是非とも、碧海さんに今一度、お目に掛たい事があるのよ、けれども所詮出られないから、汝今日は番町へ、何か用を拵へて、其途中碧海さんに、お逢ひ申して貰ひたいの」

「夫は何よりお易い御用、何時でも行って参ります、番地は分つて居りませうね」

「夫は私が書付けて置く」

「お手紙でも御座いますか」

「此の間からお母様や、長四郎さんの目を忍んで、ほんの一行二行づゝ書いたのが、漸と昨夜出来上つた、それはが手紙で、此の中に私の大事な、指輪が封じ込んであるから、萬望落さない様に、儘かにお届け申しておくれ」

「オヤ貴嬢、何の指輪で御座います」

「お父様がお死亡になる少ししまへ、買つて頂いた金剛石の」

「アラマア千圓でお買遊ばした」

「彼れだから萬望大事に」

「是をお上遊ばすんで御座いますか」

「譯は手紙に書いてあるから、是をお届け申した上、御返事を頂いて来ておくれ」
繼母伸子の足音に、主従夫と目配せして、早くも文を押置し、再び元の通り鏡に向つて髪

結を始めた時、美禰が所謂左官屋と、へんき屋を済ました伸子、頭は黒く顔は白く、何れもこて〜と塗り立て。

「オヤ、まだ髪結に掛つて居るの、へちやくちや喋舌てばかり居るから、何時までたつても出来ないのだ」

「さも憎々しく言ふを聞いて。」

「間で外の用を頼みましたから、遅れたんで御座います」

「一日髪結に掛つて居られちやア、外の事が何にも出来ない」

「是が伸子の平生である。處で光子の顔色を見て。」

「ナニ汝の用があつて、遅くなつたんなら好んです、オヤ〜大層好く出来た、今日は久しぶりで、浅草へでも行って御覽、自宅にはつかり引込んで居ると、氣の晴れる事がないから、ねへ、少しばかり運動なさい」

夫と聞いた光子は、飛立つやうに嬉しく思つた。

「汝が行けば私も行くから」

矢張喜び損であつた。

「何だか大儀で御座いますから、私は見合ませう、お母様行って御覽遊ばしませ」

「汝が否なら、私も廢止ます」

美禰は櫛笥取片附で、元の座に復つた時。

「お嬢様、夫ぢやア今日番町まで行って參る事に致しませう」

光子が返答に先だつて。

「エ、番町に、何の用かへ」

「お母様、私は美禰を遣はして、衣服を取寄せたいので御座います」

「衣服なら誰か男を取に遣つても好でせう」

「衣服ばかりなら他の者でも、宜しいんで御座いますが、序に少し書物も」

「左様、ぢやア美禰をお遣んなさい」

美禰は急いで仕度をして、例の手紙を懐中に入れ、晝飯を喰ふや否や、別荘を出掛たが、

一二丁も行った頃。

「オイお美禰どん、馬鹿に早へちやアねへか」
驚いて振り返れば、馬丁の東吉が二子唐棧の衣服に羽織で、ぶら／＼追つて来るのを見た。

「オヤ東吉さん、何方へ」

「私も番町までお使ひに行くんた、運があると大きに好い」

美禰はハツと思つたが。

「左様、夫は御苦勞さま、私ちやア出来ない御用、二人行くのは勿體ないねへ」

「何だか知らねへが夫人から此の手紙を持つて行て、旦那様にお上げ申せ、御返事が来る

筈だと私ア夫だけ言付かつた、大方歸りに重い物でも持たされる譯だらう」

美禰は飛んだお目附に出逢ひ、何うかして捲きたいと思つたが、相手もさるもの、容易に其様手は喰はぬ。

(十二)

「東吉さん、私は足が遅いから、嘸迷惑でせう、萬望私に構はないで、すん／＼先へ行つて下さい」

「ナーニお美禰どん、急ぐ御用といふちやアなしさ、運動には恰と好い、遠慮するにやア及ばねへ、ゆつくりと歩きなせへ、斯うやつてぶら／＼と、向島を歩くの、何とも言へねへ好心地だ、夫れにお天氣は好し、風がねへと来て居るから、ぶらぶら歩きにやアお誂へさ、イヨー端艇競走だな、赤々白々」

「でも何だかお氣の毒です」

「何して／＼其様事アねへ」

「夫に私は淺草で、鳥渡寄道をしたいんです」

「左様、緩りと寄て來なせへ、だが淺草は何邊だね」

「觀音様のツイ近所です」

「其様ア不思議だ、己等もね彼の邊に、寄て行きてへ處があるんだ、渡津か結構」

二人は今戸の渡を越た。

「もう車を御用を済ませて置いて、歸途に寄て行くときませう」

「ム、夫も好からう、ぢやア己等も歸途にする」

「大分疲れたやうですから、私は電車に乗ませう」

「宜しい、電車結構」

「私鳥渡買物をして来るワ」

「買物か、サア〜何でも買なせへ」

「だけでも最早廢止てよ」

「夫も好からう」

美禰はたうとう捲はぐつて、廣小路まで一處に行つた、

「マア此處でお別れませう」

「エ、何も別れなくなつて好からう、お美禰とんの寄る先きは」

「何でも此の邊に違ひないんですがね、判然家は分りません、マア〜緩りと尋ねて見ますワ」

「ヤアそりやア不思議だ、私の寄てへといふ先も此邊に違へねへが、番地を覚えて居ねへんで……ぢやアお互へに探すとしやう」

扱は扱目のない伸子が差圖で、見張の爲に來居つたなと、美禰も愈感付た。此上は何と
して、東吉の目を逃れ、光子の爲に大事の使ひを、仕遂げる事が出來やうかと、頻に胸を
痛めた末。

「東吉さんはお角力が好きで、お芝居の方は嫌ひだとねへ」

「イヤもう角力と來ちやア酒より好だが、芝居の方は左様でもねへ」

「私東吉さんにお願がある事よ」

「ナニ私に頼みとは」

「後生だから聞いて頂戴な」

「平生世話になるお美禰とんの頼み、聞かねへで何うするものか、芝居が見てへといふん
だらう」

「アライア賊心、ほんとうに東吉さんは、お察しの好い事」

「斯う見えても苦勞人だ、ハ、ハ、ハ、」

「私は全くお芝居が、お飯より好なのよ、だけれども御奉公して居ると、一年二度の敷入にお芝居を見るだけで、何時でも行かれないと思ふと、意地悪く見たいのさ、ほんの一幕、ねへ東吉さん、目をつぶつて下さいよ」

「宜しい、一幕が二幕でも構ふ事アねへ、己等が突合う」

「夫には及ばない事よ、東吉さんは嫌ひだのに」

「お美禰どんの事なら、何でも突合う、死なうと言やア死んでも好い」

「マア旨い事はつかり言つて、夫はお門が違ひます」

「何でお門が違ふものか」

「私知つてよ、だから早く汝さんは、好い人の處へ行て、顔を見せてお上なさいよ」

「オイお美禰どん、否に己等を冷かして、實ア邪魔にするんだらう」

「エ、」

「己等も男だ、邪魔にされると思つちやア、意地にも一處に行きたくなる、サア宮戸座か

常盤座か、何處へでも出掛やう、とさ憎まれ口を聞くでもなからう、愛願役者の顔を見て、樂まうといふ處を、妨げるのも實ア罪だ、ちやア是でお別れしやう」

(十三)

嬉しさに驅出した、お美禰の跡を見送つて、共同腰掛に凭れたまゝ東吉は何か頻りに考へる容子であつた。此時不意に後から東吉の肩先ぼんと叩いて、驚かした男がある。

「ア、吃驚した」

「馬鹿な奴、とうとう女に逃られやがった」

「イヨ一誰かと思つたら野島の旦那、何うもお久しぶりでしたねへ、貴君、慥か外國へお出なすつたと聞きましたか」

「左様、日本のやうな小さな處で、何を遣つても詰まらない、一番外國の廣味に出掛け、大金儲けをする積で、ハワイから亞米利加に渡つて、随分いろ／＼な仕事を遣つたが、まだ運が向んと見えて、悉く失敗に畢つた、夫から南洋支那朝鮮と、無闇に驅すり廻つたが、

旨い金儲けにもぶつつからんで、元の通りの貧乏人だ、此節は支那人に頼まれて、チーパ一の運送をしたり、西洋人の才取で、食ふ位の事は出来ても、好きな酒を心持ち好く呑む程の働きもない、何うだ東吉、昔馴染に金儲けの口でもあつたら世話してくれんか」

「失禮な事を言ふやうですが、旦那は望みが太過ぎるから、何時も中途で失錯るんだと、言つた方が御座いますせ」

「夫は左様かも知れんなア」

「元の儘お役所に、眞面目でお勤めになつて居ると、もう今頃は八十圓や、百圓の月給取にやアなられたんぢやア有りませんか」

「無論左様だ、けれども貴様考へて見ろ、八十圓や百圓で、旨い酒が呑めるか何うだ」

「月に八十圓もあつたら、酒位呑めませう」

「ハ、ハ、ハ、相變らず鄙な男だ、貴様等のやうに、ツイ牛肉屋か蕎麥屋へ飛込み、何でも酒を呑みさへすれば、宜しいと言ふ譯には不可、先づ旨い酒を旨く呑むには、夫相當な下物が入る、下物許りでも仕方がない、酒の呑める座敷から、酌をする者に至るまで、一切

道具が揃はん事には、旨く呑めるものでない」

「左様いふ贅澤を仰しやるから、何時でもお金が足りないんです」

「先づそんなものだ、今でも百圓や百五十圓、毎月稼がん事はないが、下宿料にも追付かねるよ、時に貴様は何處に居るんだ、少しは金でも拵へためたか」

「ナニニ矢張不可、今は番町の桑田さんに雇はれて、相も變らぬ馬丁でさア」

「番町の桑田と言へば、有名な金持だらう」

「へエ左様なんで」

「旨い處へはまり込んだな、夫ぢやア金も出来る筈だが」

「何うして旦那、何程お金があると言つても、澤山月給を出しやアしません」

「月給は少くても、何とか瞞着して居るだらう」

「飛んでもねへ事を」

「瞞着す譯には行かんといふのか、さて〜意久地のない男だ、何と東吉、我輩を桑田家に、引入れる工夫はないか」

「引入れて何うするでんす」

「桑田の財産を奪うのだ」

「何ですつて」

「假に千萬圓と見積もつて、五百萬圓づゝ分配すると言ひ酒が呑めるぢやないか」

「怖ろしい事を言ひ出しましたねへ」

「何だぶるゝ、慄ひ出して、其様しみたれな丁簡だから、一生馬と騾競をして人間らしい世渡りをする事が出来んのだ、兎に角我輩を桑田家へ引込む位の智慧はあらう、其れも出来ない程のでくの坊なら、話をするのも無益だが」

「そりや私だつて旦那には、生命を助けて頂いた大恩がありますから、手引位はしても好うがす、だが旦那、馬鹿に用心が嚴しいんで、滅多に仕事は出来ませんせ、其上怖ろしい犬が居ます」

「馬鹿を言へ、我輩を強盗でもする者と、間違へて居るのだらう、強盗に入つた位で、桑田家の財産が、残らず奪ひ取られるものか」

「だつて旦那は強盗位、しかねぬ方ぢやアねへでせう」

「無論強盗でも、道らうと思へば直に遣るが、同じ悪事を働くなら、強盗以上の仕事が出来、何しろ斯んな繁華な處で、悪事の相談も手賑しからう、何處でか一杯飲みながら、ゆつくりと話合う」

(十四)

裾打拂つて起立る、野島が袖を引留て。

「旦那、御馳走と聞いた日にやア、頂きたくて堪まらねへんですが、今日は大切な用を、言ひ付つて来たんで……、實アね今此處に居た女は、矢張桑田の女中ですが、邸のお嬢さんに頼まれて、情夫の處へ、手紙を持つて行くんです、其手紙を届けられちやア、また面倒が起るから、東吉跡を跟て行て、何うでも渡す事の出来ねへやう、邪魔をしると言ひ付かつて、夫でわざゝ出掛たんです」

「お嬢さんが情夫に文を贈るとは感心だなア、其の位家の中が、不取締なら愈結構、強

盗以上の仕事が出来る」

「先の旦那が生て居な中、碧海昌介といふ養生と、自宅のお嬢さんを夫婦にする様、ちんると約束があつたんで、其の碧海昌介は、故郷から遙々出て来たんです、すると東京に着く前の晩、旦那は腦充血とやらで、ひよつくり死んで仕舞ました、若旦那にしろ、夫人にしろ、何も彼も知つて居ながら、イヤそんな約束は、遂に開た事もねへといふんで、追拂ふ事にしたのも、若旦那は非常な慾張、愈碧海を婿にすると、幾干か自分の財産を分て遣らなくちやアならねへ義理です、處が出す事と出た日にやア、舌を出すのも嫌ひの上、妹の光子さんは、評判の別品だから、大金持の嫁に遣ると、向ふから支度金を、収入れる事も出来るだらう、出ると入るとは大きな違ひ、二一夭作損引いて徳残ると、算盤玉からはぢき出して、何處までも勘定づく、夫人はまた自分の物の、菅井長四郎といふて、俳優のお化見たやうな、菟野野郎を婿にして、桑田家の財産を、丸め込まうといふ了簡、唯お嬢さんだけは、何處が何處までもお父さんの、遺言を守りてへ、碧海と夫婦になりてへと、一家三人の心が三通り、其處で今日もお嬢さんは、氣に入りの女中に言ひ付け、千

圓もする指輪に、文を添て遣る事を、私が早くも見て取つて、夫人に言ひ付けると、東吉汝に限りませ、眞實に忠義な男だ、それ御褒美と言つて、五圓紙幣の一枚も、不意な儲けが出来て見ると、今日は愈忠義を盡して、邪魔をしなくちやアなりませんやね」

「聞けば聞く程頼母しい、桑田家の内訌、我輩は何となく、千萬圓の財産が、既に手に入つた様な心地がする、ぢやア東吉、斯うしやう、首尾好く邪魔を仕逐せた上、今戸の都亭といふ待合に、我輩を尋ねて来い、たんと御馳走をして待つて居るから」

「ぢやア旦那、左様いふ事にお願へ申ませう」

美禰は漸との事東吉に別れ、言ひ譯の爲めと思つて、常盤座の立見に入り、凡そ二十分間を経て飛出し、電車に乗て上野に行き、光子に聞いて置いた通り、御徒士町へと足を向け、其處か此處かと尋ねて居ると、突然後から背中をたいて。

「お美禰どん、不思議だな、また此處で行合ふとア」

「オヤ東吉さん、番町へ行たんですか」

「申藏言つちやア不可、己等が羽を持つちやア居めへし、そりやア左様とお美禰どんは、

此邊に用でもあるのか」

「ナーニ以前私のお友達が、此邊に居た筈だから、ツイ分つたら久しぶりで、尋ねて見やうかと思つたんです」

「左様か、何といふ家だね」

「あの何ですよ、の、の、のぶちやん」

「延ちやん、名前は」

「名前を忘れて仕舞たんです、もう尋ねる事ア廢止ませう」

「ぢやア番町まで一處に行かう」

今また此處で拒んでは、愈々邪魔をされると思つて、美禰も今度は快く。

「そんなら一處に行きませう」

(十五)

お美禰は東吉に伴つて、番町の本邸に歸つた後も何かして東吉の目を逃れ、光子の用事

を果したいと、いろ／＼に氣を揉んだ末、少しばかりの隙を窺ひ、庭先から驅出して、直に門前の車を備ひ御徒士町へ行た頃は、車夫が無提灯、巡査に咎められる時刻であつた。三下目で車を下り、光子の渡した書付けによつて、野島かめを尋ね當て、格子の外に立寄つた時、内には男と女の聲で、頻りに何か争ふ様子。

「御免下さいまし」

二聲ばかり音訪たが、なか／＼耳には入らなんだ。

「汝の様な人間に、姉とは言つて貰ひますまい、お父さんやお母さんの、死去なさるのを待構へて、自宅のお金は言ふに及ばず、公債から誂道具迄、お金にならうと思ふ物は、皆な引ッ擡つて家を驅出し、さんざ道樂をした末は、巡査になつたと人の噂、私は兩親を失なつた上、汝に何も彼も盗み出されて、突然食ふにも困る始末、弟の清吉と、言ふに言はれぬ苦勞をして、東京へ出て来たもの、汝の在所が知れるぢやアなし、縱令知れて見た處で、姉や弟を置去にして、自分だけ勝手な所爲をしやうと言ふ人間なら、何の役にも立やしない、もう／＼姉弟は二人ぎり、甚作は他人も他人、二人の爲には敵と思つて、姉弟の縁

を切らうと、お互に相談して、私はさる婦人科のお醫師様に下女奉公、清吉は横濱の洋服屋の小僧になつて、辛抱をしたお蔭、私は試験を受けて産婆になり、清吉は洋服の裁縫が手に入つた上、お店の御主人にも可愛がられて、立派な暖簾を分て頂き、家内も迎へて一本立の、洋服屋を開店した時、思ひ掛ない汝が来て、彼の正直な弟を欺かし、今度俄に農商務省から、商業視察の御用を聞いて、歐米諸國を廻る事になつた、姉さんや汝にも永い間苦勞を掛けたが、もう今度歸つて来ると、局長位には必ずなるから、喜んで貰ひたい、若し歐羅巴や亞米利加に、取引の用があれば、遠慮なく言が好い、汝が年來世話になつた、店の主人にも一應逢つて、挨拶をして置きたいと、清吉に案内させて、御主人に逢つた上、さんざ法螺を吹き立て、とうとう亞米利加の商館に送る、二千弗のお金を預かり、其の儘影を匿したので、可愛さうに弟は、大事の御主人を失損しました、汝は私や弟に、何の恨があるのなら、重ね々苦しめます、サア早く歸つて下さい、詐偽取財をするやうな人は、弟と言はしません、姉とも思つて貰ひますまい』

「ハ、、、相變らず姉さんは、理窟ッばくて困る、成程僕のした事を、一途に悪く思ひ詰たら、随分腹も立ませう』

「立たなくて何するものかね』

「イヤ左様、怒つては不可です、両親は死去た跡、家を継ぐ者は誰でせう、貴姐は總領に生れても、女だから仕方がない、して見ると即ち僕です、處がまだ小兒ぶとりで、學問もなし智恵もなし、見事親の跡を繼いで、姉さんや弟を、養うだけの力がなかつた、其處で一番大奮發をして、大學者か大金持に、なりたいと決心したが、所詮此の事を相談しても、姉さん始め親類まで、承知される筈はない、寧ろ無断で驅出して、立派な者になつた後、お詫をしたいと考へたです、然るに東京に出るや否や、大金を盗まれて、學校に入る金もなし、商賣は愈出來ない、己を得ず巡查になり、追々東進して警部に上られ、頗る首尾も好かつたですが、總監になつて見たからが、格別有難い事もない、寧ろ洋行をして、大金持になりたと言ふ考へから、例の二千弗もほんの一時、借入れる筈でしたが、亞米利加へ着くや否や、忽ち熱病に罹つて、二月あまり入院したので、二千弗は烟のやうに、忽ち消失して仕舞たのです』

詰たら、随分腹も立ませう』

「立たなくて何するものかね』

「イヤ左様、怒つては不可です、両親は死去た跡、家を継ぐ者は誰でせう、貴姐は總領に生れても、女だから仕方がない、して見ると即ち僕です、處がまだ小兒ぶとりで、學問もなし智恵もなし、見事親の跡を繼いで、姉さんや弟を、養うだけの力がなかつた、其處で一番大奮發をして、大學者か大金持に、なりたいと決心したが、所詮此の事を相談しても、姉さん始め親類まで、承知される筈はない、寧ろ無断で驅出して、立派な者になつた後、お詫をしたいと考へたです、然るに東京に出るや否や、大金を盗まれて、學校に入る金もなし、商賣は愈出來ない、己を得ず巡查になり、追々東進して警部に上られ、頗る首尾も好かつたですが、總監になつて見たからが、格別有難い事もない、寧ろ洋行をして、大金持になりたと言ふ考へから、例の二千弗もほんの一時、借入れる筈でしたが、亞米利加へ着くや否や、忽ち熱病に罹つて、二月あまり入院したので、二千弗は烟のやうに、忽ち消失して仕舞たのです』

「エ、もう左様言ひ譯を、聞かなくても澤山だ」

「左様姉さんのやうに神經質になつては困る、僕は實に非運です、其後、もすること爲すこと、悉く失敗に畢つて、空しく歸朝しましたが、ツイ此頃になつて、漸く運が向いて來たです」

「夫はまア結構ですが、何しろ早く歸つて下さい」

(十六)

お美禰は今にも東吉が、追纏て來るかと思つて、更に落附く事が出來ぬ。

「御免下さい、少々お願ひ申します」

最初は遠慮勝に音訪たお美禰も、次第に聲が高くなつた。けれども一向聞えぬと見え。

「貴姐實に困るなア、全體事の成否をもつて、志の善悪を推定するのは酷ですよ、若し僕が自宅の有金公債證書を持出して、一時貴姐方を苦めても、思ひの儘成功して、大學者が

大金持になつて居ると、貴姐方は恨を忘れて、僕を善人と思つたでせう」

「そんな事は思ひません、何でも好からお歸んなさい」

「あの少しお願ひ申します」

「假令貴嬢の方は僕を敵と見て居られても、僕は姉さんと思つて居るから、仕方がないぢやアありませんか」

「イーエ、姉とは思つて貰ひますまい」

「随分無理なお話です、僕が思つて居る事を、思ふなと言つても、左様勝手にはなりません、けれどもお氣に入らんとあれば、歸つても好いです」

「お願だから歸つて下さい」

「弟の清吉は、今何處に居るんです」

「知りません」

「貴嬢が御存じない筈はありますまい」

「知つて居ても話しませんよ、弟は人が好から、また何とか欺かして苦しめる積でせう」

「左様悪くばかり考へちやア不可、僕は詫をしたいですから、何うか番地を教へて下さ

い、ねへ、お願いです姉さん」

「お詫には及びません、今度私が逢つた時、思召は傳へて置きます」

お美禰はとう／＼堪へかねて、格子戸を敲き掛た。

「何誰ですか」

「野島さんと仰しやるのは、此方ですうねへ」

「産婆の野島は手前ですが、何方から入らつしやいました」

「あの渡渡伺ます、此方に碧海さんといふ方が、お在になると聞まして、お尋ね申しに

出ましたか」

「エ、碧海さん、お待ち下さい、唯今お目に掛ります」

野島かめは手燭に火を點て、格子戸の鍵を外し。

「マア貴姐此方へお入り下さいまし」

お美禰は格子の内に入り。

「飛んだお邪魔を致しましたが、今晚碧海さんは、お留守なんで御座いますか」

「碧海さんはね、もう宅に居らつしやいませんよ」

「オヤ左様で御座いますか、何方へお宿かへになりましたでせう」

「夫がさつぱり分りません、都合に依ると遠方へ、出掛けるかも知れない、愈居先が極

るといふと、郵便で知らして遣ると、仰しやいまして御座いますよ」

「ぢやア何處へお出になつたか、御存じないんで御存じますねへ」

「私も何うなすつたかと思つて、お案じ申して居るんですよ」

「お行方が知れなくちやア、何うも仕方は御座いません、大きにお邪魔致しました」

お美禰はがつくり力も抜け、しほ／＼と暇乞して、路次口へ出掛た跡から、追つて來た野

島かめ。

「モシ貴姐は番町から、お出になつたのと違ひますか」

「ハイ實は桑田のお嬢様から、お使ひに參つたんです」

「オヤ左様でしたか、お嬢さまは御機嫌宜しう御座いますか」

「永い間一方ならぬ、お世話になつた儘、一言のお禮も申さないで歸る事になつたから、無物の分らない者と、思つてお出になるだらう。汝お目に掛つたら、委しく事情をお話し申して、お詫ごとをしておくれ、實に野島さんは、御親切な方だと言つて、朝晩お話し遊ばします、其のお禮も申したいと、存じては居たんですが、何やらお客さまの御様子で」「ナニもうお嬢さまの御都合は、碧海さんからも伺つて、好く私は存じて居ます、唯お歸りになつた跡も、いろ／＼な御心配で、お體に障りやアしないか、夫ばかり旦でも暮ても、お案じ申して居たんですよ、實は碧海さんからの御傳言もありますし、お逢ひ申したいは山々ですが、若し私のやうな若が上つて、お嬢さまの御迷惑になると、濟まないと思ひますから、御無沙を致しました、碧海さんのお傳言は、若しお嬢さまの處から、お使ひでも見えたなら、お別れがけのお言葉を、今後は堅く守りますと、夫だけ申上げてくれろと、いふ事で御座いましたよ」

お美禰は厚く禮を述べて、野島かめに別れ、今は疾く立歸つて、光子に復命したいと思ひ、二三四も行った時、突然後から抱留たものがある。

「オヤ、誰です、東吉さん、人が悪いねへ、吃驚さしてさ」
 言へども更に答はなかつた。

(十七)

今戸の都亭と言へば、隅田川に臨んだ待合。其の離亭の小座敷に、主人の女房は向島から呼寄せた二人の藝妓を相手にして。

「ほんとうに何うなすつたんだらうねへ、先刻電話が架つたのよ、日が暮ると出掛るから、是々の用意をして置けつて、夫にお客が来る筈だ、若し私を尋ねて見えたら、直にお酒でも出して、暫く待つてくれる様に、左様言へと仰しやつたお聲は、確かに野島さんと思つたのよ」

「ぢやア今にお出になるでせう、居らつしやる處は知れないんですか」

「サア夫をツイ伺はなかつたの」

「お宅は横濱ですとねへ」

「ナニお宅からぢやアなくてよ、先刻のは上野の自動電話だと仰しやつた」

「お客さまでも入つしやりさうなもんですねへ」

「何だつて斯なにお暇が入るんでせう」

「随分野島さんも、お交際が廣いから、お朋達に誘はれてまた數寄屋町へでも、お出掛になつたんだらう、今にも入らしつたら、皆なで苦責て上やうぢやアないか」

此處へ遣つて來た野島甚作。

「イヤ何も遅くなつて濟まない、客人は」

「貴君が數寄屋町の藝妓家か何かに被捉つて、餘りお遅いもんだから、お客様は呆れ返つてお歸りになりましたよ」

「ナニ歸つた、待たして置いてくれ、ば好のに、彼れ程頼んで置いたものを」

「ア一是で胸がすいた、ほんとうはね、未入らつしやらないんですよ」

「左様か、まだ來ない、遅いなア、何しろ早く一杯呑みたい、皆な茫然待つて居たのか、酒でも呑まして遣れば好のに」

「そりア貴君、數寄屋町邊の待合見た様に、氣が利いて居ませんからねへ」

「何だ、先刻から頻りに數寄屋町を引合に出すが、ハ、ア分つた、上野の自動電話へ飛込

んで、先刻の話をしたもんだから、數寄屋町にでも出掛たと、判定を下したんだな、其

の占は大違ひだ、時に餘り遅いなア、今夜は來ない積か知ら」

「夫御覽なさいな、待身は辛いものでせう」

「酷く今夜はいぢめるなア」

「お迎でも出させうか」

「ナニ左様までせんでも宜しい」

野島は頻りに酒を呑んで、大分酔も廻つた頃、尋ねて來た馬丁の東吉。

「何うも旦那、大變遅くなつちまつて、相済みません」

「何だ今頃遣つて來て……、貴様は何うかして居るな、とうく先刻の女にも、首尾好

くまかれて仕舞つたんだらう」

「マア其のまかれて仕舞つた方は、何うでも構やアしませんか、實ア飛んでもねへ事に關

係つて、馬鹿な暇を費しました」

「飛んでもない事に關係つた、マア飲みながら話すが好い」

「貴客お酌」

「憚りさま、イヨ一昔なお馴染の姉さんだ」

「貴様此の連中を知つて居るのか」

「エ、もう昔なお馴染です、別荘のお客ぢやア、何時も姉さんがたの御苦勞で」

「貴客、今朝程はお樂み」

「エ、何のお樂み」

「美しい女の方と嬉しうに話しながら、自宅の前を通つたでせう」

「ア、彼れか、彼れは邸の仲働さ、處が今夜あの女は、途中で盜賊に殺された」

「オヤ、何うしたんです」

「實ア其の事に關係して、斯なに遅くなつたんだ」

「ナニ盜賊に殺された、夫は大事件だなア」

「何でも後から遣つて来て、突然魔睡劑を嗅したさうです」
 「左様か、物騒な事だなア」
 「併し官鹽梅に助かる事は助かりました」
 「ハア甦へつたか、其は宜かつた」

(十八)

野島甚作は藝妓に命じて、一騒ぎドツと騒がせた上、夫れぐに纏頭を興へて、程好く返す事にした

「サア東吉、是からが肝腎の相談ぢや、何うかして桑田家に、僕を引入れる工夫はないか」

「左様ですわへ、折角のお話ですから、何うにか工面をしてへものだが、随分旦那は悪漢

と、名が聞えて居ますからねへ」

「勿論野島甚作で、入込む事は出来んから、名は何とでも取換へるさ」

「なかく、難かしい相談だ」

「何の難かしい事があるものか、唯我輩が突然出掛て、桑田健三に逢つた處が、早速千萬圓の財産を、奪ひ取る譯には行が、其處に何か少しでも、きつかけが有りさへすると、夫から先は我輩が、旨い工合に取入つて、桑田健三母子の者に、所謂催眠術を施すと、何でも我輩の言ひなり次第、千萬圓僕に下さい、宜しいといふやうな事になる」

「真逆旦那、左様は問屋で卸しませんや」

「イヤ卸させるよ」

「だが其きつかけといふ奴が、馬鹿に難かしいんで」
「輕業の口上言ひぢやなからうし、そんなに自分の藝道を、難かしいの危いのと、勿體付

けんでも宜しい」
「勿體付ける譯ぢやアねへが、先刻お話し申した通り、今の旦那と言ふの、怖ろしい慾張りで、貧乏人が大嫌へ、何でも金のとつさりあつて爲になりさうな人の外、交際はねへといふ立込です」

「サ、夫が有難い處だ」

「だつて旦那は金がねへ」

「實に貴様見たやうな、正直者は滅多にないア」

「此奴ア大笑えた、嘘を吐くやら賭博を打つやら、随分間にや竊盗もする、正直者の隊長で御座い」

「ぢやア貴様は桑田の金を、千圓と纏まつて、瞞着した事があるか」

「何して、其様大袈裟な事を……ほんの時たま買物をしちやア、賣主と相談の上、一圓か二圓のお錢を、瞞着するのがせいぎりです」

「千萬圓の身代から、一圓二圓をせしめる様な、意氣地なしがあるものか、盗賊させても正直だ、……ハ、ハ、ハ、マア夫は何でも宜しい、兎に角我輩を引入て見ろ」

「何いふきつかけにしたら好か、私にやア分りませぬねへ」

「困つた男だ、桑田健三が慾張りなら、慾をもつて啗はすと、早速信用するだらう、人間癖がありさへすると、必らず取入るきつかけは出来るよ、況んや慾の充た者程、取入り易い事はない、貴様明日でも桑田に逢つた時、昨夜は料らす元の主人、何某に僅見して、御馳

六八
走になりました、其の人は實に不思議と、金儲けの名人で、凡そ是まで行た仕事を、一度も失錯た例はない、永く外國人に雇はれて、支那や亞米利加に行て居たが、今は夥多しい金を拵へて、捨場に困つて居るさうだとか、何とか旨く話して見る、忽ち慾の蟲がこみ上て、一度其の人に逢ひたいと來る」
「馬鹿々々しい、何程何だつて詰らねへ、そんな嘘ッばちが言はれますか、全然反對だもの、金の捨場に困るなんて」

「笑うなよ」
「今まで何を遺つて見たつて、出來た事ア一度もねへのに、金儲けの名人、アッハッハッ、逢つたら貴君困るでせう」
「困るものか、愈慾の蟲に逢ふ時は、夫だけの覺悟をして、必ず金儲けの名人と思ひ込ますだけの話を仕向ける」
「ぢやア一番大袈裟に嘘を吐て見ませうかね」
「遺れ、思ひ切つて遺て見い」

「だが大變な慾張だから、滅多に金は出しませんせ」
「慾の深い人出程、金を失ひ易い者はない、桑田家の財産は、屹度己の物にして見せる」

(十九)

光子は己が部屋と定められた、離亭の六疊に引籠つて、何か頻りに考へて居る、此處に音訪たのが、例の菅井長四郎で、頭から顔の掃除、今日は別段手を盡し、奇麗に粧り詰て居る程、愈胸が悪くなる。

「オヤ光子さん、お一人、美禰は何處へ参りました」
「番町へ使はしました」

「夫ではお淋しいでせう」
光子が精神はお美禰に伴はれて去り、今頃は御徒士町へ行た時分、碧海さんはお在宿だらうか、首尾好くお目に掛りたいものと、夫ばかり考へて、外に心の散りやうはない、左様とも知らぬ長四郎は、何かな光子の御機嫌に叶ひたいと、不馴な前座がつなぎに出て、欠

仲の二三つもされた様に、四苦八苦の思ひをして、無性矢鱈に喋舌立る。

「何うも光子さんの様に、陰氣にして居らつしやると、お體に障ります、そりや最早何下せうとも、五六ヶ月も夫婦同様、暮して居た男に別れて、氣の鬱陶のも御道理です、だけでも好く考へて御覽なさいよ、お母様にしろ兄様にしろ、光子さんを大事と思ひ、未々爲にならない人に、嫁て置くのは可愛さうだ、萬望立派なお婿さんを取つて、幸福な世を渡らせたいと、考へての事ですから、貴嬢も其處を辨へて、もうく彼な男の事はふつゝりと思ひ切り、外に眞實桑田家の爲、貴嬢の爲を思ふ様な好お婿さんをお取んなさい、一體御婦人といふものは、胸の狭い、何でも物事に凝過て、一度斯と思つた事は、何時までも忘れない、ア言は執念深いもので、芝居を見ても死んだ跡まで、ひゆうどろくと迷ふて出るのは、大方女の幽霊でせう、けれども夫は昔の事、殊に光子さん杯は、高等教育まで立派に受て學問のある方だから、裏店小店の娘の様に、お母が何と言はうと、兄弟が何と言はうと、戀しい男の尻を追つて、恥辱も世間も厭はないと、眞逆そんなお心はない筈です、ねへ、左様でせう、兎角一室に閉ぢ籠もつて、鬱陶しくして居ると、いろんな事を思ひ

出します、夫で貴嬢が體を悪くしても、男は氣の毒だとも思やアしません、てんで親兄弟の許しも受ず、貴嬢を攫つて行くやうな、慘忍な男ですもの、もう今頃はまた外から、新規に女を攫つて来て、慰み物にして居るのでせう、彼いふ者に關係した婦人は、つまり田舎料理屋の、酌婦に陥られて、難儀をする位が結局です、貴嬢は早く救はれて、何んなに幸福だつたか知れませんが、其の代り貴嬢の居所を、探り出さうといふに付いては一方ならぬ苦心でした、警察の手を借るとか、探偵會社に頼むとか、そんな手段を取つた日には、早速世間に知れ渡つて、桑田家の恥ですから、其の晩貴嬢のお供をした、中働の美禰と馬丁の東吉の外は、誰にも堅く知らせないで、光子さんは病氣の爲、別荘に出養生と、廻して置いたものです、其の中行方搜索に付いては、私が専ら力を盡して、夫こそ實に寝る眼も寝ず、方々尋ね廻つた結果、料らず下谷御徒士町に潜伏してお出になる事を、私が探り出したんです、貴嬢が桑田家の令嬢でありながら、酌婦に賣れると言ふやうな、不名譽を通れたのも、言は私の骨折なのよ」

精神の留守見舞に来て、何程喋々辨じ立ても、木偶同様な光子の耳には、馬耳東風程も感

しなんだ。

(二十)

馬丁の東吉は、野島甚作にをしへられた通り、主人桑田健三に向つて、思ふさま嘘を吐いた、すると健三が慾の蟲は、忽ちぐつとこみ上て、是非逢つて見たくなる、東吉は雙方の間に立つて、一生懸命骨を折り、極めて都合よく取計らつた。

會見の場所は向島なる、桑田家別荘と定められたが、素より野島甚作ではない、大澤秀行と偽名した上、會見の二兩日前、築地の東洋ホテルに移つて、洋行歸りの大紳士と觸込んだ、先づ驚かされたのは東吉である、愈何日の何時を期し、お出を願ふと言ふ使者に差立られた東吉は、ホテルの小使が案内で、大澤の部屋に通つた、處が昨今ホテルは暇で、好外国人の泊りもないから、大紳士の大澤は、最上等の部屋を借り、盛んに贅澤を極めて居る、東吉は主人の供で、毎度玄關までは遣つて來ても、まだ客室に通つた事はない、然るに最上等の部屋を見せられて、殊の外膽を潰し、扉の下に突立つた儘、眩ゆい程の室内

を、きよらきよらと見廻して、美しい絨氈に、足踏み掛る事は出来ぬのである。

薩摩焼の大花瓶に、紅白の梅を活て、中央に載せた卓机に向ひ、薫の好いシガーを吹いて横字新聞を讀んで居た大紳士。

「ム、東吉か、此方へ、遠慮するな」

「ちやア入つても宜しいんで」

「差支ない、此處に椅子がある」

願の先で指揮しながら、拱手命を待つて居る、小使に向ひ。

「コーヒーに菓子、夫からシャンパン」

小使は領承して退いた。

今まで精一杯我慢して居た東吉は、小使が室を立去るや否や。

「旦那、マア、是は、何うしたといふんです、私ア斯んな奇麗な座敷を、遂に見た事はありません」

苦しい息を呑みながら、わざ／＼己が椅子を離れ、聲はして尋ね掛た。大紳士は落附拂

つて。

「イヤ日本の旅館は、如何にも不完全で困るよ、尤も宿賃も安いがな」

「旦那安いと言つても、二三圓は掛りませう」

「左様ぢや、一食其の位な物で座敷料はたつた五十圓」

「エ、一ヶ月五十圓」

「一ヶ月は千五百圓ぢや」

「何うも實に呆れて仕舞つた」

「ハ、ハ、ハ、東吉、見つともない、貴様も日本では金持と言はれる、桑田家の馬丁、其の位の事で、驚く奴があるものか」

「だつて驚かなくちやア居られませんかやね、併し何せ喰迷でせう」

「失敬な事を言ふな」

「けれども旦那ア錢がなくなつて、此の間も待合で、藝妓に纏頭を出すといふ時、私から借た癖に」

「夫は其の時の事、今では千萬圓の財産がある」

「まだ取もしねへ物を……、實に私ア旦那の様な、大は螺吹を見た事アねへ」

「吹くなら此の位に吹かにやア不可」

「斯見た處滅法界、好洋服を拵へましたねへ、身姿ア實に大したもんだが、荷物ア少ともありませんねへ」

「手提革匣一個、總ての荷物は二三日中に来るといふ事に話してある」

「何處から」

「横濱から」

小使は先づ見事な菓子と、コーヒーを持って来て、更にシャンパンを酌廻した。

「東吉まだ荷物は來んか」

「へエ、荷物」

「横濱から都合五十個程、桑田に宛て、送る筈ぢや、久しぶりに歸朝して、日本の勝手が分らんから、取敢ず荷物の方は、桑田の邸に届ける様、言付けて置いた」

「ナ、成程」

「荷物が来たら大切に預かつて置く様、貴様が主人の健三に言へ、中には寶玉類の入つたものもある、彼を一個失つても、桑田家の身代では、償う譯に行かんのぢや」

「ハイ、歸りました上、旦那に左様申しませう」

「何うぢや東吉、山の手の閑静な處と、銀座邊の最も繁華な處に、少し地面を買入れたいが、心當りはないか、場所さへ好と價は構はん」

「ナ、何の位の處で」

「山の手は住居にするから、先づ五千坪以上、多い分は差支ない、繁華な處は會社の敷地ぢや、是も千坪以上は欲しい」

此の時外の小使が道て來て。

「唯今外務大臣から、電話で御座いまして、今日でも明日でも、鳥渡お尋ね申したいが、お差支のない時をお知らせ下さいと申す事で」

「左様か、まだ電話口に待て居るかね」

「ハイ」

「今明は用があつて、お目に掛る譯に行かん、其中此方からお尋ねすると、答へて置いて貰ひたい」

「ハイ畏りました」

「いろいろな連中に追廻されて、實に蒼蠅、東吉シャンパンをたんと飲れ」

(二十一)

馬丁の東吉が二三十分間話中に、絶えず小使は出入して、其の都度電話を取次だが、相手は日本銀行總裁、正金銀行の重役、總理大臣、農商務大臣、何れも知名の人々であつた夫が辭を低うして、面會を乞求めるのに、大紳士の大澤秀行は疊に外務大臣に、返答を與へた通り、頗る傲慢の態度をもつて報ひた。東吉いよゝゝ驚いて。

「旦那何も驚きましたねへ、自家の旦那なんかア、随分名高へ金持でなく巾の利く方ですが、夫でも大臣に逢ふと言ふにやア、容易な事ぢやア有りません、處を向ふから頭を

下で、是非お目に掛りてへ、何時伺つたら好う御座います、萬望お知らせ下さいと言ふのに、今日も明日も差支て、お目に掛る事ア出来ねへ、暇になると此方から出掛るといふ御挨拶ア、何も實に剛勢なもんだ」

「へい、畢竟已に逢ひたいと言ふのは、外債の世話でも頼む、了簡に違ひない、ナ、一億や二億の事なら己の名を以て電信を架けると、明日にも早速間に合ふが、久々で歸朝して着廻話を聞くのは否だ、マア二三日は落附いて、遊びたいと考へる、時に貴様が今日参つたのは、何ぞ用事でもあるのか」

「除まり面喰らつたんで、肝腎の用を忘れて居ました、旦那が今日三時頃から向島の別荘へ、お出を願ひてへといふ譯で」

「左様が、今日の午後三時だ、宜しい」
傍に立つて居る、給仕の者を顧つて。

「何か旨うな料理を二三品」との命に、給仕が立去る影見送つて。

「東吉、旨い都合に遣つたと見えるな、貴様にしては大出来ぢやよ」

「そりやア旦那、私の辯口で旨い工合に説き付けて遣つたんです」

「えらい、全體何んな事を喋舌たのか」

「畢竟旦那に教はつた通り、大嘘を吐きました、今日また邸へ歸つた上、電話の一件を話さうもんなら、自宅の主人驚くに違へねへ」

「マア、彼んな事ア言はん方が宜しい」

「だつて旦那、彼れを話すと驚きますせ」

「夫は驚くかも知れんが、實ア嘘だ」

「エ、嘘だ、ぢやア給仕まで共謀で、景氣を付ける譯なんですわ」

「給仕如きが抱込めるか、實は此ホテルの者を驚かして、好く待遇させやうと言ふ計略の爲の電話だ、共謀者は外にあつて、外務大臣となり、銀行總裁となり、岩崎となり、三井となり、時々いるんな電話をかける」

「何せそんな事だらうと思つたんです、だが斯んな宿に居ちやア、馬鹿に費用が掛るでせう、勿味ねへ」

「先づ何程儉約しても、一日六七十圓は掛る」

「その金を何するんです」

「三日か四日籠城をしても、差支ないだけの、兵糧は貯へてある、鳥渡身姿を繕うだけに、二三百圓は掛つたから、永く落付ては居られん、二三日の中には是非移轉す」

「今度ア何方へ」

「先づ向島の積だ」

「好い家があるんですか」

「好といふ程でもあるまいが、何か斯か住へるだらう」

「一軒家を借りますか」

「イヤ自分の家にするとなれば、是でなかく金が入るから、當分は下宿だなア」

「何しろ向島だと、お近くで都合が好い」

「今何か持て来たら、早く喰て歸れよ、時間は午後三時だな」

「へ、三時で」

「御馳走があるか」

「儲か八百圓に言付たやうです」

「貴様に聞て置きたい事がある、桑田健三は惣一方で、金を貯るのが道樂、外に好きな事はないのだな、夫から継母は」

「夫人は芝居が好きで、時々内所で青年俳優を買ふてな時もありますが、眞黒な面に白粉こてく、見てもぞつとする様ですせ、今年五十二三だのに、三十位の若作り、人が年齢を聞くと、當て御覽なさいといふのが癖です、其の時若く言つて遣ると、大變お氣に入りますが、先の旦那の時から、お出入をした植木屋の久八といふ、正直な老爺さんが、もう夫人は五十四五かと、女中に聞た事が知れて、夫ツきりお出入を差止められた位なんで、實に驚いちまひます」

「面白いな」と、シガアの烟を吹きながら、

「全體俳優は誰が最負か」

「何でも詰らねへ俳優で、純帳へ出るさうです、私ア芝居が大嫌へだから、俳優の名ア知

りませんが、何時か女中の高といふのに、寫眞を見せて貰ひました」

「何んな、俳優だった」

「何だか詰らねへ、何處か旦那に似たやうな顔だったと思ひますがね」

「怪しからんなア、己に似たやうな顔で詰らんとは」

給仕が料理をもつて來たので、二人は談話を中止した。

(二十二)

約束の時間一分の遅速もなく、桑田家の別荘に音訪た、洋行歸りの大紳士、主人健三は不
得手ながら、商業學校を卒業して、鳥渡學問もあり智恵もあり、東吉風情が口先に、ツイ
ふわりと乗せられる程、淺慕な人物でもないが、慾といふ弱點に附け込まれて、一途に東
吉が言葉信じ、未見の大澤秀行を頭から買被つた。

伸子は桑田家の後室として、他まで權力を持続したい、行々は婿の長四郎に、是非とも光
子を娶はして、桑田一家の財産を丸呑みにしたいといふ、希望を抱いて居る處から、何事

にも出しやばりたがる、殊に來客の接待は、最も得意とする事で、健吉が存生中から、來
客發應の接待は、いつも自分に任されたが、健三の代になつても、矢張舊慣を守つて居る
畢竟健吉は豪傑肌で、用事の外は餘り多く、口を吐ぬ質の人物、酒宴に客を招いても、自
ら酔へば席に仆れて、無城慮な高野、嘘にも客の機嫌を取つて、待遇事は出來なんだが
其處へ行くと伸子の方は、酒が強くてお喋舌で、座を持つ事が旨いので、客も健吉を相手
にするより、伸子の方が氣も置けず、何となく面白から、偶に引込んで居る時も、客の
爲に引張り出された、夫ゆゑ健吉が死んだ後も、以前交際した人は、絶えず伸子を訪問す
るので、健吉在世の時よりも、伸子の威權は輝いて居る。

今日大澤秀行を招き、饗應をするに付いては、健三頗る大乗込、朝から男女の召使ひを指
揮して、盛に準備を整へた。

「何時もお客と言へば、苦い顔をする人が、今日はマア何したといふんだらう、大變な騒
ぎだ、一度八百松に言ひ付た料理を、八百善でないといふ不可ッさ」

伸子が長四郎の部屋に行つて、不平らしう話す折柄、飛込んで來た健三。

「お母さん、此處にお出でしたか、實は今日午後三時から、客をする考へです、其の客人といふのは、久しく外國へ行って、諸種の商工業に従事した、大澤秀行君、是は交際をして置くと、充分利益のある人ですから、何か懇に待遇したいと考へます、お母さんも是非お逢ひ下さい」

何でも有力な人物は、健三より自分の方に、引寄せたい兼ての望み、今日も眞ッ先に健三から、相談を受けて居れば、早速例の左官とペンキ屋、額際を塗り分けて、氣持よくお粧飾した上、人先に立つて、世話焼かうと思つたのに、相談が遅れた爲め、仲子は自強て見たくなつた。

「左様ですか、私なんかお目に掛らなくても好でせう」
 實際は其方が宜しい、客人のある毎、八百屋の婆アさんをつくりといふ姿で、お座敷に願はれた上、べちやくちや喋舌立られるのは、面白からぬと感じた健三、夫故此の節は別荘に、光子が監督といふ名儀を附し、敬して遠ざけて居るもの、今日の客は別荘に限る、若し其の席に仲子を招かず、自分だけで舞應と、必定御機嫌に違ひ、下女下男に當り散ら

して、何かな邪魔を入れられる、健三此の手を二度喰つて、頗る懲て居る處からさまゝに機嫌を取り、漸と化粧部屋に追込んだ。
 此大澤の舞應が、桑田家破滅の原とはなつた。

(二十三)

大紳士の大澤は、桑田健三母子に逢て、頗る手厚い舞應を受けた。大澤は頭から、健三を小兒視して、己れはずつと大人を氣取り、成るべく議論めいた事を避け、世間話の間々にちよいく健三が急所を突いて、懲の蟲を喜ばした。

兎に角仲子も健三も、大澤が望んだより、打解たといふ事は明かに分つた。大澤は明日ホテルに、健三仲子を招待し、晚餐を供したいと言ひ向けて、直に承諾の答を得。其の翌日は仲子の案内で、芝居見物を約束した。

大澤は午後八時過桑田家の別荘を辭したが、運動の爲と稱して、わざと車に乗らぬのは、渡を越して例の通り、待合都々に行く下心。

呑みたい酒もたんと呑まず、勤めのふりて勤めた大澤、漸く地金を頭はして、牛飲馬食する處に飛込んだのは、馬丁東吉。

「私が占は好く中るな、旦那が彼の儘築地まで、歸んなさる筈はねへ、必定此處だと見當を付けて」

「飲みに来たのか、抜からん奴ぢや」

「ナニね唯飲むだけなら來やアしません、旦那に早く話をして、喜ばしてへと思ふことがありますから、わざ／＼跡を追つて來ました」

「イヤ實は己も貴様に逢つて、跡話が聞たかつた、何うだ己の評判は」

「旦那全く不思議ですせ」

「貴様が主人の慾張も、己には八百善の料理を出した、跡でも頗る譽て居たらう」

「大譽です」

「ハ、ハ、ハ、彼な小僧を欺すのは何でもない」

「マア其旦那より御隠居さんが、滅法な乗込やうです」

「左様か、彼れはなかく氣味の悪い女だ、併し彼を籠絡むのが、寧ろ捷徑かも知れん」
「私ア御隠居さんが部屋へ歸つて、衣服を着換ながら、女中の高に話して居るのを、竊り立聞したんです」

「何と言つて居た」

「マア自宅に來るお客さまで、彼の位立派な方はありやアしないつて」

「ア、凜然とする」

「一件に似て居てよ、嬉しいぢやアないかつて、フン、旦那、お騙んなせへ」

此の時待合の女主、自身銚子の代りを持つて來て。

「旦那お淋しいぢやア有りませんが、藝奴を聘てお遣んなさいよ」

「イヤ今夜はもう歸る、明日はいろ／＼用があるから、時に女主、僕は是まで野島と言つたが、實の姓名は大澤秀行、今後は大澤と言つてくれ」

「大澤さんですね」

「左様だ／＼大澤秀行、夫から今夜までの勘定を、悉く拂つて行く」

「アラ否ですよ、何時でも好ぢやアありませんか」

「先づ一くぎり附けて置かう」

「お姓名變があつたと言つて、そんなに改まらなくても好でせう」

「イヤ改まらにやア不可よ」

「今夜お歸りになるんですか、もう汽車はないでせう」

「僕は横濱へ歸るんではない」

「オヤ何方へ」

「築地の東洋ホテルに居るのだ」

「アラ、ホテルに、左様ですか」

東吉は此處ぞと思つて大澤の爲めに喋舌立た、

「何うも旦那、私ア彼んな奇麗な宿を、見たことがありませんねへ、左様でせう、何しろ一

日に七十兩も要るんだから、女主人さん、一度行て御覽なせへ、そりやア實に驚きますせ」

「是非其の内に伺ひます」

「来るなら明日の午前が好い、其時書付を持つてお出」
「ハア萬望左様いふ事に願ひませう」
大澤は東吉を相手に、まだいろ／＼話しながら、頻りに酒を酌み交し、十二時頃大酩酊で東洋ホテルへ立歸つた。

(二十四)

初翌日は午後五時の案内、仲子と健三は二頭立の馬車に、相乗でホテルに來たが、二人とも内心には、大澤が勢のえらいのに驚いた、晚餐は和洋折衷の料理、頗る念入の響應であつた。

「而して貴君はまた西洋へ、お出遊ばすんで御座いますか」
仲子に尋ねかけられた時、

「左様、實はもう飽ましたから、一度日本へ歸つて見て、何か好さうな仕事があるなら歸り切にしたいものと、考へて居た譯ですが、何分久しく日本を去つて、事情が更に分り

「ません」

「もう貴君お歸りになつた方が、宜しいぢやア有ませんか、ねへ健三」

「實に我國商工業の、何時までも振はんのは、全く人を得ない爲です、商人や職人に學問をさせるのは、有害無益と信じられた、維新前も維新後も、殆んど同じ有様で、他の學術の進歩に比して、商工業の幼稚なことは慨歎に禁みません、畢竟農工商を、社會の下級に置れたのが、今に頭に染み込んで、脱することが出来んです、夫ゆゑ今日の社會に在つても、實業家の多数は、極めて無學無識です、偶學識のある人が、實業界に飛出して、是は所謂學水練、經驗のない上に、一般の組織が、全然違つて居る處から、必ず失敗に畢ります、今若し貴君の様な、學識經驗に富た方が、日本の實業者を率ゐて、盛んに誘導鼓舞され、始めて舊來の陋習を破り、進歩の域に向ふ事も出来やうかと信じます」

「イヤ實に御卓見ですよ、斯んなことを、申ては、高慢らしいや聞えませうが、歐米諸國の實業界に、立交はつて居た目では、如何にも幼稚な様に見えます、今の内何とかせん事には次第に國は貧乏します」

伸子が退屈さうな容子を見て、程々に話頭を轉じ。

「併し故郷とは言ひながら、日本は實に好國です」

「ですから貴君外國行は、もうお廢止に遊ばせな」

「マア一年程逗留して、篤と日本の事情を察た上、何れとも決ませう、時に妙な事を伺ひますが、御別荘の御近所に、座敷を貸す處を、お心當りはありませんか」

「オヤ貴君がお借遊ばしますの」

「左様、宿屋仕居といふものは、何となく蒼蠅で不可、今度歸朝した事は、成べく人に知らさん積りで、誰にも通知は出しませんが、ツイ泊込の西洋人に、知己の者でもあれば、夫から夫に傳へ聞て、知つた人も知らぬ人も、日夜尋ねて見えるので、殆んど是には困り切ります」

「ほんに左様で御座いませうねへ」

「随分懇意にする者から、是非自宅へ來いと言つて、勸めてはくれますが、何も場所が氣に入りません、御別荘の近所は、實に宜しい處ですな」

「貴君是非彼方へお出遊ばせ、何處かない事は御座いませんよ」

「二軒家を借切るとか、買受るとか申す事なら、直にもありさうな話ですが、是に一戸を構へますには、信用の出来る下女留守番を、先づ探すといふ様な、困難がありますから、愈進退を決するまでは、其様面倒も避けたいです」

「御道理で御座いますよ、私どもの別荘が、今少し大きければ、是非来て頂きたいと存じますが、二室位ではお狭いでせうねへ」

と言つ、伸子は意味ありげに健三の顔をちよいと覗いた。

「ナニ貴姐、一室でも宜しいです」

「夫に随分住荒して、彼の通りで御座いますから」

「イヤ何う致して、御別荘の様な處を、到底他に求める事は出来ません」

「貴君さへお構ひなければ、外に宜しい處の見附かりますまで、ねへ、健三」

「此方に差支はないですが、お待遇といふ事も、所詮今の有様では、出来まいと思ひます」

「イヤ恐れ入ります、お待遇は手前から、お断りを申したので」

「夫れも御承知なら結構です、では貴君早速左様いふ事に遊ばして」
健三は母の顔をじろりと見て。

「併し却つて御迷惑でせう」

「イヤ飛んだ事を、若し御別荘の一室でも拜借が願はれますと、此の上もない幸福です」
前日大澤秀行が、馬丁の東吉に向ひ、向島に移轉る、心算と言つたのは即ち此の事の豫告であつた。

(二十五)

大澤秀行が思立は、不思議な程都合好く運んで、第三日目、即ちホテル響應の翌朝は、向島なる桑田別邸へ、移轉る迄に運んだ。其の日秀行が進物は、主人健三に佛像一個、是は先年安南を経過した時に、武古寺に立寄つて旨く支那人に盗ませた、美徳家の参考ともなるべき品。伸子には白縮緬一疋、光子には緋縮緬一疋、長四郎には旅行用化粧道具。其の外男女の召使には、何れも金十圓づつ。前の主人健吉が死んだ後、桑田家の召使ひは、益正月

にも一圓以上貰つた事は殆んどない、然るに手土産代りとして、銘々に十圓づつ、彼等

は福の神の降臨と、下にも置かす待遇するのである。

年にも耻の好色の伸子は、良人健吉の死後、親戚朋友の中に就て、彼れか是かと當りを付けたが、ペンキ塗の額を見ては、誰相手になる者もない、偶に合點しさうなのは結局慾との相談で、何となく氣味が悪く伸子も前後を考へては、滅多なことも仕出されず、先づ其の方では至つて手堅い、人間と見做されたが、大澤秀行は最負役者の、何某に似て居る上頗る財産もあると聞いて是ならばと思ひ詰め、初對面の其折柄、往々怪しい目付をして思ふ心をほのめかせば、先でも同じ意味を込めて、見返す様子が頼母しかつた、是から後は一切夢中で、とうとう向島の別荘へ、引き入れる事とした。

慾に眼の眩んだ健三、戀に心を奪はれた伸子、初めから迷ふた目には、好處だけ氣が附て滅多に缺點は見えななだ。況して召使ひの者共は、主人以上に敬つたから、別荘に於る大澤の威權は、實にすさまじいものであつたが、特に冷やかな眼をもつて、大澤を見る光子には、随分不思議な感じも起り、大澤にしる別荘中で、光子ばかりは上の方から、己が手

品を見て居る心地、何うやら種を割られさうで、何時も小氣味悪く感じた。横着極まる大澤は、寧ろ光子を社中に加へて、桑田家財産横奪といふ、千番に一番の危い手品を物の見事に、遣つて退けうと決心した。

「ヤア光子さん、お邪魔をしても好ですか、兩三日桑田君は、番町へお歸りきり、御隠居さんは菅井君と、お墓参りをなされたさうで、餘り淋しいからお邪魔に出ました、何うです

「ハイ何だか矢張すぐれませんか」

「畢竟御運動が足りないから不可、少し天氣の好い時は梅屋敷邊へでも、出掛て御覽になるが宜しい、元來東洋の婦人は、唯柔順いとか内端とか言ふ事を貴んで、始終深窓の下に居られるから、兎角性質が陰氣になつて快濶な處がないやうです、勿論婦人の生意氣なのは、誰も嫌う事ですが、快濶な氣象だけは、何うか養ひたいものです、貴嬢なぞは位地と言ひ學問と言ひ、卒先して日本の婦人を、誘導するに足る方です」

「オホ、何う致しまして私の様な不束者が」

「左様でないです、僕も日本に歸つて後、随分上流の夫人令嬢に、交際をして見たですが、まだ光子さん程の方に、出會つた事はありません、イヤ全くお世辭ではないです」

「アラアア飛んでもない事を」

光子は一笑に附して去て、再び相手にならぬのである。

「光子さん、一度歐米漫遊にお出掛は如何です、日本婦人と言へば、皆醜業を營む者と外國人に思はれるのが、僕は實に遺憾です、少し上流の婦人方で、漫遊に出られるか、留學をせられると、直に名譽を回復します、勿論婦人ばかりでもないです、米國邊に出掛る書生も、大方日本の喰詰者で、到底充分な學問を仕遂げる事は出来ません、既に先日横濱で僕は盜難に遇つたです、是も矢張の國へ、密行をする悪書生が、盗んだといふ事で、多分此頃香港邊で、捕縛にならうと思ふですが、何とか言ふ奴でしたよ、ム、左様、慥か碧海と言ひました」

(二十六)

碧海！

光子の耳には雷霆のはためき渡るやうに響いた。

「エ、碧海」

大澤はシガーの灰を椀の下にはぢき落として。

「左様です、碧海、ヘキカイと誓くのです、何でも米國商船の石炭庫の中に匿れて、密航したといふ事ですが、出帆前僕の宿から、慥かに革匣を持出した事を、見た者があつたんで、早速追手を掛ましたが、奈せん出帆の跡で、取返す譯にも行かず、ナニまた價に積つた處で、僅か五六百圓の物ですから、夫が爲罪人を作るのも氣の毒、寧ろ其の儘捨置く事に決しました、然るに數日の後に至つて、其の僕の革匣の中に、亞米利加から頼まれて來て、さる人に渡すべき品物のあつた事に氣が附きました、其處で僕その人に逢つて、委しい事情を話した上、畢竟僕の粗漏だから品物でなり代價でなり、辨償の義務は盡す、夫で勘辨して呉るやう、いろいろ宥めて見ましたが、イヤ品物は僅かでも、そんな奴を助けて置いては甚だもつて宜しくない、懲しめの爲告訴して貰ひたいと、非常に喧しく言はれて

見ると、僕は夫を逃つて止める譯にも行かぬので、餘儀なく其筋に訴へましたが、大方も
う二三日中、香港に到着して、捕縛される事せう、左様いふ輩が外國に行て、日本人と
名乗るので、大に我々も迷惑します、ハ、ハ、ハ、

「貴君其書生は香港に着次第、捕縛されるんで御座いますか」

「無論捕縛の上、送り返されなければなりません、心柄とは言ひながら氣の毒なものです
よ、斯んな事なら寧ろ早く訴へて置くんでした、左様すると神戸邊で、捕へられる事にな
つて大きに本人も樂でしたが、十四五日間も石炭の中に潜つて、潮と香港に着くや否や、
突然縛つて牢に入れられ、便船次第本國に送還される其跡が、竊盜犯で懲役とは、随分念
の入つた處刑です」

如何に平氣を粧ひたくても、涙は隠し切れないんだ。

「書生の名は何と申します」

「名ですか、エ、碧海、ム、思ひ出しました、昌介と言ふ奴です」

「ナニ昌介」

「碧海昌介、いや、間違ありません」

「モシ貴君、何かして其の告訴を、取消すと申す事は、出来ないもので御座いませうか」
大澤は殊の外、驚いた顔付で。

「オニ告訴の取消ですか、左様ですなア」

「貴君に告訴を勧めた方に、其の品物を償ひましても、お許し下さる事は出来ないでせう
か、ねへ大澤さん」

「強ち左様でもありませんが、怒り僕から仲裁をして、萬一妙な疑でも、起されると困
りますから、ツイ訴へる事にしました、併し何ですか、貴嬢は其の書生に付いて、憫むべ
き事情でも、御存じといふ譯ですか」

「ハイ、好く存じて居ます、其の方は竊盜をする様な、悪い方では御座いません、私は全
く何かの間違だらうと思ひます」

「左様ですかね、けれども現在盗んで行く處を、見た者があると言へば」

「イ、エ、夫は間違です、慥かに間違とは思ひますが、折角香港まで行たものを送り還し

になつた上、假にも竊盜の嫌疑が掛つて、捕縛になるといふ事では、名譽にも拘ります、私は何でも致して、其の代價を償ひませう、貴君恐れ入りますが、萬望其方にお話しをなすつて、告訴は願下になりますやう」

「ハア、貴嬢が御存じの人ですか、左様と知れば初めから、穩便にして置くんでしたが、ナニ先方にしろ、僕から懇に諭しますと、強て告訴取消に、反對もせんでせう」

「而して其品物の代價は、凡そ何科で御座いませうか」
「三百圓位の品です、マア併し金子の處は、御心配に及ばんです」

「何致しまして貴君にそんな事迄も、御心配頂いては濟みません」
「兎に角急に談判をして、今日明日の中に取消の手續を運ばん事には、間に合んかも知れません、香港に着いて、一旦捕縛になつたものを、解放してくれろと言つても、警察で困るでせう」

「實に憚りさまですが、其様事になりませぬ前」
「承知しました、僕只今から出掛ます」

子 實

「金子の處は今晩中に、何とか致しますで御座いませうが、萬望此の事は母や兄にも秘密にして頂きます」
「ハ、ア秘密に、宜しい、貴嬢が御存じの人とあれば、決して誰にも話しません」

(二十七)

昨日今日の暖かさに、別荘の梅林は、紅白打混せて、三分通綻びた。相變らずシガーを啣へて遊歩を試みる大澤秀行、夫と見て立寄つた東吉。

「旦那、大分花が咲きまして御座います」
「ム、東吉か、追々好時候になつて來たな、マア其處へ掛けて、一服やつては何うだ」

「へエ火をお借申しませう」
二人は極めて日當りの好い四阿屋に腰を掛た。

「旦那昨日は、濱へお越しでしたか」
「ム、出掛だよ」

子 實

「お歸りが遅いつて、大變な騒ぎでしたせ」

「左様か、悪女の深情とか言つてな、彼なるから往生するよ、如何に千萬圓が欲しいと言つて、随分ペンキ屋には閉口だ」

「ペンキ屋さんが氣を揉むのは、別に不思議もねへんですが、平生マア執らかと言やア、旦那を嫌つて居てお嬢さん迄、二度も三度も私を見掛て、まだ大澤さんはお歸りにならな
いか、何故斯んなにお暇が取れるんだらう、横濱の仕舞汽車は何時まであるかと言つて、
馬鹿に心配して居たんです」

「ハ、ア兎角婦人には氣を揉まれるよ」

「だつて彼の大澤さんは、何時まで此邸に居るんだらう、何だか怪しい人だと言つて、女
中たちに話した事も、私は聞いて居るんです、夫が昨日の様に待つと言ふのは、何も全然
合點が行かねへ」

「ペンキ屋は年寄りの上、頗る醜い面だらう」

「そりやア左様ですとも」

「夫に反して光子嬢は、年も若し容色も好し、先づ得難い佳人だらう、何程慾との相談で
も、ペンキ屋だけを後生大事に、守つて居る譯には不可よ」

「だつて何ですせ、日外お話した通り、お嬢さんには許嫁の、碧海昌介といつて、可愛い
男があるんですせ」

「無論ある」

「旦那や御隠居さんが、何かして思切らして、外の婿を取せうツて、いろ／＼説法して見
ても、死んでも否だと言んですせ、其お嬢さんを手に入つたつて、及ばぬ鯉の漣昇り、其
奴ア駄目だ」

「可愛い男のあるものを、一圖に思ひ切つて仕舞へ、己の言事を聞けと言つても、誰か承
知するものか、先づ男に愛想を盡かさせ、そろ／＼と情を掛て、靡かせる謀を工夫するの
が肝腎ぢや」

「左様は問屋で卸しませんや」

「處か此方で思つたより、何時も問屋は安く卸すよ、實は初て逢つた時から、光子嬢には

ぞつこん惚つて、是非とも手に入れたいと考へたが、的桑田の家内中で、一番人間が賢いから、容易な事では氣を許さん、若し此儘にして置くと、頗る仕事の邪魔になるで、何分抱込む工夫をしたいと、智恵袋を絞つた末、先づ第一情夫に、愛想を盡させる手段として斯いふ話を持掛た、先日横濱で賊に遭つて、革匣を一個盗まれたが、其賊は亞米利加に、密航を企てた、碧海昌介とかいふ悪書生、ナニ僅か五六百圓の品物、夫が爲罪人を作るのも氣の毒と思ひ、其儘に捨て置たが、革匣の中に亞米利加から、附託されて来た物の入つて居る事を思ひ出し、早速受取人に逢つて、實は是々で盗まれたが、品物でなり代價でなり、私から償ふ事にして、勘辨を頼むと言つたが、先方では大層怒つて、訴へるが好いといふから、已むを得ず告訴したが、もう、明日か明後日頃は、香港へ着く日積、着けば忽ち捕縛の上、便船次第送り還され、懲役になるだらう、心柄とは言ひながら、不便なものだと話す中に、光子嬢の顔色は、眞青になつて仕舞た」

「そりやア全く拵へ事で」

「勿論」

「可愛さうに、お嬢さん泣いたでせう」
 「大いに泣いた、其の上で、自分が何うでも品物は償ふから、是非願下をしてくれろと、折入て頼み居つた、宜しい、然らば先方へ談判の上、願下をしゃうと言つて、横濱へ出掛たから、歸りを待つも道理じや、何と東吉恐れ入たか、鳥渡一度嘘を吐ても、三百圓位の金にはなる、其上光子嬢に碧海の事を、盗賊と思はせたり、己を親切な人と感じさせて、追々手の掌に丸め込む、下拵へが出来ろのぢや」

(二十八)

憎むべき大澤は、斯の如くにして光子を欺き、三百餘圓を騙り取つて、一面は慾を充し、一面は恩を賣つて、光子が心を奪はんと圖つた。彼は奸智に長て居るから、頻りに健三に取入つて、信用の度を高め、雇人には金を撒いて、己が勢力の扶植に力め、仲子との關係も、お互ひ注意に注意を加へて、人目に立たぬ様秘密を守つた。
 まだ半歳も経ぬ中、桑田家に於ける大澤は、顧問たる位地を占め、其の重なる事業、即ち

光子は聲を慄はして。

「盗賊とは誰の事で御座います」

「僕の革匣を盗み居つた、碧海昌介の事でせう、貴嬢が三百圓の金を出して、告訴を取消す事にした」

「貴君がたから思はしい、盗賊と疑はれた、碧海昌介、彼は全く人違ひです」

「人違、怪からん、現在盗んだに違ひないから、我々は告訴したです、又貴嬢にしろ盗まれん者に、三百圓といふ金を、償ふ譯はありますまい」

「貴君のお考へが間違つて居ます、若しも碧海が盗賊でも、働く様な人間なら、何で金を償ひませう、假令餓えて死までも、曲つた事をしない人が、如何に災難とは言ひながら盗賊の嫌疑を受けては、何なに悔しう御座います、其上、香港までも行かうと言には、一方ならない苦心をして、漸く参れたといふ事も、好く私は知つて居ます、夫に覺もない答で、引戻すのが残念ですから、私は貴君に願つて、告訴を取消して頂きました、碧海は潔白な精神で、曲つた事は致しません」

「困るなア今更そんな事を言れちやア、貴嬢は一途に迷つて居られる、其處で碧海昌介も正直な人間と見えるだらうが、彼れは盗たに違ひないさ、兎角あんな下らん奴は、貴嬢の良人に相應しない、もう既に竊盗罪で、赤い衣服を着る處を、貴嬢は救ふて遣られたから彼に對する義理は濟んだ、三百圓を手切として、断然廢止の方で好です、僕は飽までお勸めする」

(二十九)

此程から大澤が、しげく光子の部屋を訪ふて、如何にも親密に見えるのが、伸子は何となく氣に掛り、人知れず胸を痛めた。けれども母子と名の付く間で、嫉妬がましい舉動を見せ、賤ないものと一概に思はれる事を恐れたから、成るだけ色にも顯はさず、愈大澤と光子の中に、怪しい關係があるか無いか、確かめたいと注意して居た。今日も伸子は番

町に出掛け、歸りが遅くなるかも知れぬ、事に依れば泊つて來ると、車夫に傳言をして歸し、充分油断をさせて置いて、夕刻突然歸つて來た。わざと門前で車を下り、裏から東手の庭に廻つた時、離亭の障子の硝子越しに、大澤と光子とが親しく語る姿を認めて、胸は俄に沸返つた。二人は割合に小聲で話して、問答の要領を、伸子は聞取る事が出來ぬので、愈疑の念は増た、始め墨一枚位の間を隔てた大澤は、次第に近く身を寄せる、伸子も我知らず進み寄り、今は離亭の縁側から、精々二間の處まで來て、石燈籠の影に潜んだ。無法極まる大澤は、暴力をもつてしても、非望を遂げやうと決心した。ツと寄つて光子が手を執る、此の刹那足を爪立て、首を伸した伸子が力に、石燈籠は地響して、前の方へとうと仆れた。

流石の大澤も驚いて、障子さつと推開けば、思ひ掛ない伸子、仆れた石燈籠の代りに突立ち、懐いとも怖いとも、言ふに言はれぬ目附をして、じろりと顔を覗んだから、大澤は二度喫驚。

「ヤア御隠居さん、何時の間にお歸りになりました、ア、石燈籠が仆れましたね、危い事

で、何處もお怪我はありませんでしたか」

「ハイ、怪我でも致せば宜かつたんですが、生憎何とも御座いませぬ」

其の儘さつさと立去つたが、拾置譯にも行かんと見えて、大澤は慌しく、伸子の部屋へ驅付けた。

此の時伸子が大澤を、睨付けた怪しい目つきと、不思議なる挨拶で、光子は繼母と大澤が凡の交際でない事を悟り、大澤は桑田家を、掻亂す者として見て取つた。

以來伸子は片時も、大澤に目離せぬので、光子は心を安んじたが、普通妬婦の習ひとして伸子は大澤を恨むより、光子を恨む事が遙に深く、何に付けても辛く當つた。

一日桑田健三が、別荘に音訪た時、伸子は馬車の音聞付けて、玄關までわざ／＼出迎へ、健三が影を見るや否。

「アア好處に來て下さつた、私の方から出掛やうと思つて居たのに、サア萬望此方へ」

伸子は其の儘自分の部屋に、健三を誘つた。

「何か急な御用でもあつたんですか」

「外の事でもありません、私は光子さんの事が、何うも氣になつて仕方がないから、早く極りを付けて下さい」

「ハア、其事ですか、私が今日参つたのも、實は其御相談で」

「オヤ左様、何を其方に心當りでもありませんか」

「光子を貰ひたいといふ望み人は、殆んど數へきれん程です、併し是ならば位地もあり財産もあり、必然桑田家の爲になるといふ者は至つて少いやうに思はれます」

「左様ですとも、所詮氣に入る人はありません、好しんば此方で氣に入つても、未始終が心配です、何故と言つて御覽なさい、光子が碧海と逃した事は、いくら秘密にして置いて、知れない譯には行きません、婚禮をした跡で、若も婿が夫を聞くと、忽ち離縁になるは必定出たり遁入つたりする毎に、無駄なお金を掛た上、世間に恥を掻くよりも、寧ろ何も彼も承知の上で貰はうといふ者を、婿にするのが互ひの爲です」

「イヤ御道理です、何うも夫が宜しいかと、私も考へます」

「夫に限りますよ、左様すると費用も入らず、ほんの内輪で済む事だから」

「其處が實に肝腎です」

此處までは母子の意見が、切組だ程しつくり合つた。

「貴君も左様いふ御意見なら、早速先方の意を問ませう」

「ナニ改めて相談も何も入つた事ぢやア有りません」

「夫では承知して居られますか」

「承知處か先方では、待構へて居るんですよ」

「ヘエ待構へて、何か平生貴母に向つて、お話しでもありませんか」

「真逆叔母さん光子さんと、添はして下さいとも言やアしないが、大概様子で分ります」

「マアお待ちなさい、貴母の仰しやる相手は誰です」

「誰でせう長四郎」

「長四郎、ハ、ハ、ハ、夫は見當違ひです」

「オヤ長四郎ぢやア有ませんか」

「私の申すのは大澤君です」

「エー」

伸子は非常に驚がされた。

(三十)

伸子が仰山な驚き方には健三も驚いた。

「大澤さん、マア、彼の方が光子さんと、婚禮しやうと言ひましたか」

「イヤ其様事は聞ません、先方から貰はうと言へば、至極都合も好んですが」

「大澤さんの方で、貰ひかけたんぢやア有ませぬね、誰がそんな話をしました」

「會社に居る重なる者から、頻りに勧められました」

「重なる者ッて誰の事です」

「銀行部長の金守と言ひ、貿易部長の栗原なども、熱心に勧めてくれます、けれども大澤君は碧海の事を湖々知つて居るやうですから、所詮承知しまいと思つて、今日まで躊躇しました、今朝鏡山部の横尾が見えて、頻りに勧め立た末、大澤君には我々から、乾度承

知させると言つて、堅く受合せて見ると、多少何か考へた上、三人が三人とも勧める事と信じます、で、私、私も決心を致しました」

「夫れは駄目です、雙方とも承知しません」

「光子は彼の通り強情ですから、所詮承知しませんでせう、併し夫は何うでもして、厭服する考へです、唯大澤君は如何でせうか勿論三人の重役は儘に受合うと言て居ます」

「假令光子は厭服しても、大澤さんを私達から、厭服する事は出来ません」

「其は無論です」

「大澤さんが承知しません」

「貴母其事を御存じですか」

「知つて居ます、好く知つて居ます、私は疾から大澤さんを、光子の婿にしたいと思つていろいろ謎を掛たんです、けれども大澤さんは不承知です、今若も其様事を明白地に言ひ出すと、大澤さんは大礙困つて、此處を立退かうとするでせう、全株金守や栗原が、何と言つたか知らないが、大方此處に一緒に居るから、詰まらない噂でも、聞込んだ事がある

んでせう、夫で皆なが早呑込、もう内々の相談は出来て居る位に思つて、そんな事を言ふんです、けれども大澤さんは不承知なのよ」

「大澤君は不承知でせうか」

「何だつて承知しませう、今承知する位なら、私が彼程勧めたのに、聞入れない筈はありませんか」

「左様ですかねへ、して見ると言出した處が、互ひに感情を害するだけで、何の効もない事です」

「お廢止なさい、夫ばかりはお廢止なさい、そんな無理な事を望むより、お父様がお壯健な中も、長四郎と夫婦にすれば、お互ひ心も知り合つて、嗜好からうと仰しやつた事を、毎度私は承つて居るし、碧海との一件も、長四郎なら承知の上、光子の方でも長四郎と夫婦になれと言ふ事なら、喜んで聞入れます」

「夫は覺えないものです」

「汝は何にも知らないから不可、成る程以前は光子の方で、碧海昌介一てん張り、外に心

を散さないから、長四郎も嫌つて居たが、碧海と逃した事までも、委しく承知して居ながら元の通り親切に長四郎がするのを見て、光子も心根に感じたものか、此節は明けても暮ても、長さんくと暮ふ様子で、何も凡ぢやアなさうです、此の上當人が不承知なものを無理に壓服していろゝな面倒を起すより、長四郎に添はした方が、家の爲にも好でせう、ねへ、左様いふ事にして下さい、私、何時からか話さうと思つて居ても、ツイ好機會がなかつたんで」

「何れにしても碧海との關係を断に付ては、早く光子の身分を極めるが、肝要だらうと思ひます、愈左様關係があるなら、早速婚禮させませう」

「何うか宜しく願ひます」

(三十一)

一度光子を疑つてから、離敵の思ひをする仲子、義理一逼の口は吐ても、其部屋に音訪て親しく言葉交す事もなかつた。夫でも光子の身に取つては、優しく言つて嫁入を、勧めら

れるより勝であらう。

或日川子は片手に菓子を持ち、片手に茶盆を持ち、にこりと入つて来た。睨まれる事に馴れて居る光子は先もつて氣味悪く感じながら、平生に變らず笑顔して、快く繼母を迎へた。

「光子さん、虎屋のお菓子を取つたから、お茶一つ上やうと思つて」

「マア左様で御座いますか」

「斯んな好い陽氣に、たれこめて居ては悪い事よ、サア一つお食んなさい、今日は少し相談があります、ナニ外の事ぢやアないが、汝も何時までばんやりして居る譯にも行くまいし、第一私や兄さまが、何んなに心配だか知れやアしない、汝は飽くまであの碧海に、義理を立て居なさるが、汝を此方へ引戻した時、碧海は兄さまに向つて、此後關係致しませぬ、假令途中で行合つても、口も吐かないと言たさうです、だから今に尋ねても來ず、手紙一度寄こさない、もう大方彼の人は、ほかへ養子に貰はれたか、似合相應な女を探して、嫁を取るかしたでせう、左様いふ薄情な男に、義理を立てても無駄な事です、就てはいよ

〜二三日中に、婚禮をさせるから、好く光子が得心する様、言つて聞かして下さいつて兄様からのお話です」

「エ、私は二三日中に、婚禮を致しますか」

「左様、何時までも斯して居ると、世間の人がいろ〜な、悪口を言ふさうです」

「假令人は何と申しても、私は碧海さんの外、婚禮致さうとは思ひません、私は碧海さんと約束した事が御座います」

「オホ、何んな約束があつたにもせよ、碧海さんは兄さまに、實は僕も困つて居ました、引取つてさへ下されば、是ざり關係致しませんと、くれぐれも言つたとすれば、汝との約束も反古にする心なんです、好く左様言ふぢやアないか、男心と秋の空ツて、變り易いもんだから、馬鹿正直に守つて居ると、いつも女は酷い目に遭う」

「私は碧海さんに、今一度逢ひますまで、嫁入は致しません、先では約束を破りまして、私は破りません、私は悪賢いと言はれますより、馬鹿正直と笑はれる方が、望みなんで御座います」

「今更何と言ひなすつても、兄さまの命令を背く事はなりません」

「イーエ兄さまに致した處が、お父様の御遺言をお背きになります上は、私も兄さまの仰しやる事に従ひません」

「マア好く考へて御覽なさい、今となつて兄さまの、言ふ事を聞かないと、汝の身に取つて大變損です、兄さまに捨られたら、汝何しやうと思ひます」

「私は兄さまに、捨て頂きたいので御座います、光子はもう死んだものと、思つて頂きたいので御座います」

「汝そんな事を言つて、捨られたら何うします」

「桑田家から追出されましたも、お母様や兄様のお恥辱になる様な事は、決して致すまいと存じます」

「年の若い女が、親兄弟に捨られて、他人の中へ入つて御覽、何んな恥かしい事を、させられるかも知れませんが、夫より長四郎と婚禮すれば、財産を別て頂き、氣樂に遊んで暮されます、左様なさい、ヨ、何程汝が否だと言つても、兄さまのお指圖だもの、従はない

譯には行きませんが、マア長四郎と夫婦になつて御覽よ、彼は何なに親切だか知れない」

「イーエ私は奉公を致しても、貴姐がたのお恥辱にならない様、きつと致してお目に掛

「奉公しても、オホ、桑田のお嬢さんとも言はれるものが、奉公すれば此上もない、親兄弟の恥辱です」

「一度約束した事を、此方から背きますのは、奉公を致すより、餘程恥辱で御座います」

「そんなら是程言ひ聞しても、汝は不承知と言のかへ」
此の時仲子が氣に入りの女中、高といふのが飛んで来て。
「御隠居さま、碧海さんといふ方がお出になりました」

(三十二)

「エ、碧海、何だつて其様奴が来たんだらう、追返してお仕舞ひ」

「お母様、萬以碧海さんに鳥渡でも、送して頂きたう御座います」

「イ、エ逢ふには及びません、高、旦那様はもうお歸りになつたかへ」

「まだ居らつしやいます」

「夫ぢやア旦那様の方に、申上げるが好い」

「旦那様に申上げましたら、差支があつて、逢れないと仰しやいました、其の事を申しますと、夫ぢやア御隠居様に、お目に掛りたいと仰しやいますんで」

「私も少と差支があつて、逢れないと言っておくれ」

「ハイ、左様申ませう、けれども御隠居様、あのそれ書生の碧海さんとは違ひます」

「ナニ乞兒とは違ふのかへ」

「もう四十許の方で御座います」

「ア、左様か、夫れぢやア必定乞兒の兄だよ、何でも好から追返してお仕舞ひ」

光子は熱い涙を流して。

「お兄様、お兄さんであつて見れば、遙々とお故郷からお出になつたんで御座いませう、私には是非お目に掛ります」

「成りません、兄様から逢す事は、出来ないと云てあります、高、早く追ひ返してお仕舞ひ、ぐづぐづ言は巡査を呼んで、引渡しても好んだから」

「ハイ、長ましまし」

「高、待ておくれ、お兄様、何故お目に掛る事は、出来ないと云て御座います」

「兄さまからの言ひ付です、高、何をぐづぐづして居るんだねへ」

「ハイ、」

「東吉に話をして、追返させれば好んだよ」

「ぢやア左様致しませう」

「高、鳥渡お待ち」

「用はないから早くお出」

「ア、高、鳥渡、高や」

高は伸子の命を奉じて、其の儘玄關の方へ立去つた。脊中や膝の毛もすれて、怪しく光るフロックコートを着、埃食だ黒の高帽子の處々折れ目

の入つたのを、少し上向に頂だいて、一見田舎紳士と見える風采、極古い形の手提革匣を
支那の片隅に置いて、頻りに何か屈託顔。折柄飛んで来た女中の高は、突立つた儘ぞんざ
いに。

「あの御隠居様にも申し上げましたが、お目に掛る事は出来ないと仰しやいます、ハイ何う
もお氣の毒さま」

其の儘奥へ入らうとするのを、彼の紳士は呼留めて。

「お女中、マア鳥渡お待下さい、では御隠居さんも、逢はれんと仰しやりますか」

「左様ですよ」

「先刻もお話し申した通り、是非ともお目に掛りたいんで、容易に出脱けられない體を、
何うか斯うかと無理に差繰、遙々山京致したものです、お客さまならお歸りまで、お待申
すで御座いませう、萬一旦那様でも御隠居様でも、是非お逢ひ下さりますやう、お手敷な
がら今一度、お執り次を願ひたい」

「無駄ですよ、幾度申上たつて、逢はないと仰しやるんですもの」

「何ゆゑお逢ひ下さる事が出来んのですか」

「それをえが知るものですか」

「イヤ貴姐にお尋ねするではない、何うか其邊の事を伺つて頂きたいので、私はな、
決して御常家に對し、御迷惑を掛やうなぞと、思ふ心はありません、唯何誰にかお目に
掛つて、一言承ひたい事があります、旦那や御隠居に、お逢ひ申す事が出来んなら、お嬢
さんにお目に掛りませう、お嬢さんには先年一度、お逢ひ申した事もありますから、何う
か貴姐お執次下さい」

「不可せんよ、お嬢さまだつて逢ふ事は、否だと言つて居らつしやいます」

「お嬢さんに限つては、よもや其様な事は仰しやるまい、是非何うかお取次を」

「駄目だと言ふのに執拗ねへ、私は旦那様や御隠居様が、逢はないと仰しやるから、お嬢
様貴姐でも、逢つておやり遊ばせと、左様申して試たんです、だけでも否だと仰しやるか
ら、仕方がないぢやありませんか」

「夫ぢやア彼のお嬢さんも、私にお逢ひ下さらん……」

紳士はハラ／＼と涙を溢した、女中の高は嘲笑ひつゝ。

「だから最早思ひ切つて、歸つた方が好んですよ、左様なら」

「モン鳥渡お待下さい」

「まだ何を申すか、私は忙しい體だから、左様しちやア居られませんよ」

「御迷惑でもありませんが、切望暫時お待下さい」

紳士は忙はしく夾囊から、紙幣一枚取出して紙に包み。

「是はほんの手土産の代り、何を關へたいと存しても、さつぱり様子が分りませんから、失禮でも此の儘で」

「オヤ是を私に下さるの、濟みませんねへ、ナニ私だつて眞實に、お氣の毒だと思ひますから、旦那様や御隠居様、夫にあのお嬢様にも、鳥渡達つてお上げ遊ばせつて、いろ／＼申したんですよ、マア遠方な處を、態々お出になつたのに、お氣の毒さまですねへ」
高が容子はがらりと變つた。

(三十三)

「イヤ、御親切に忝けない、夫程お取做し下さつても、逢はんとあれば已むを得ません、が、先年私の弟昌介と言ふ者が、此方へお尋ね申して來た筈、貴嬢若し御存じはありませんか」

「アラ昌介さんと仰しやる方の、お兄さんで御座いましたか」

「貴嬢昌介を御存じですか」

「好く御存じ申して居ますよ、彼の方は先の旦那様が、お死去になつた翌日、東京へお出になつて、番町のお邸の近所に下宿をして居らしたんです、お若いに似合ない、好く行届いて、ほんとうに感心な方でした」

「大方毎度お世話になつたで御座いませう」

「あの何なんですよ、書生さんの下宿住では、不自由なものですから、汚れたシャツや猿股は、御意慮なくお持なさいつて、マア／＼私の出来るだけは、御世話もした積です」

「左様でしたか、そんな事も心得ませんから、ろくく御禮も申述んで、イヤもう弟ではありながら、子と言ても好い位、年の違つた昌介、其上田舎育ちでな、さつぱり物事に気が付ません」

「何致して彼の方は、飛だ人付の好い、何事にも行渡つた、極々優しいお方でしたワ、烏渡靴足袋一足、洗つてお上げ申しても、お高どん、有難ふ、是で手拭でもお買と言て、十銭銀貨の一つも、必定お出しになつたものです、イ、エ貴君からそんな事をして頂いては、何の役にも立ませんと言て、一々夫をお返し申すと、お高どん濟ない、僕も養生の事だから、夫ちやア當分借て置かう、追つて一所に禮を言ふよ、僕は決して忘れないと仰しやつて、御喜びなさいました」

「嗚弟は喜んでせう」

紳士はまたもや革匣の中から、水引掛た反物を取出して。

「是は田舎の手織でな、見掛は悪いが丈夫一方、お嬢さんへ土産の積、わざわざ織らせて來ましたが、逢ふ事もならんとあれば、よも斯んな土産物、受うとも仰しやるまい、是は

弟がお世話になつた、お禮の徴ちやお納め下さい」
「貴君、お廢止なさいましよ、斯んな見事な物を、マア左様ですか、お氣の毒さまで御座いますねへ」

「何せ田舎で織らした物、所詮お心には叶うまいが、不斷着にでもして下さい、さて昌介が事です、今は何處に居りませうか、若し貴嬢御存じなら、何うか知らして頂きたい」

「斯んなお話をするのはお氣の毒さまで御座いますが、何いふ譯か此方では皆様が碧海さんを大變にお嫌ひなすつて、尋ねてお出になると言ふと、留守を作つたり虚病を構へて、お逢ひにならないのは未しも、果は碧海さんの事を、乞食養生だの盜賊だの言つて、御門の外に引摺出すやら、巡查さんに引渡すやら、ほんとうにお可愛さうな事でした」

「ナニ弟を乞兒養生、あの盜賊と申立て」

「貴君是は竊りとお話をするんですから、萬望其のお積りで、私に聞いたと仰しやつては、困ります」

恨の涙吞み込ながら。

「必ず貴組に御迷惑掛る事はありません、健吉さんが御歸郷の際、お話になつた事もあるし、其の後お手紙で上京の儀を、頻りに御督促下されたから、早速思召に従ひ、弟を出しました處、若京の前晚、健吉さんはお死亡になり、未亡人を始め、健三さんのお待遇に付ては、實に不審な事だらけ、併し一旦上京したからは、何でもして一人前の人間になる覺悟、必ず心配するなと言つて、唯夫だけ知らした跡は、折々壯健で居る事を、雙方通信する許り、少々氣に入らぬ事があつても、忍んで勉強をする様にと、弟には異見を加へ桑田家には此の上ながら、宜しくお頼み申すと言つて、折々書状を呈しても、遂に一度桑田家から御返事がなかつたんで、心配をして居る中、妙な噂を聞いたので、無理に出京して見ると、弟は行方知れず、桑田家の虐待も大方は聞きましたが、何ういふ譯で弟を、夫程酷く扱はれたか、仔細をお尋ね申す爲、今日此處へ參つて見れば、人を人とも思はぬ舉動、實に驚き入りました」

紳士が熱心に話して居る時、馬丁の東吉玄關へ遣つて来て、怪しげな目配せすれば、お高笑つて首肯ながら、何つの間にか消えて仕舞ひ、其の跡に東吉は、のっそりと立つて居た。

(三十四)

紳士不圖心付けば、何の間にか女中は消いて、馬丁にかはつて居たから、ハッと許り驚き感ひ。

「モシ今此處に居たお女中さんは」

東吉はにつこり笑つて。

「お高どんですかへ、彼女は奥に御用があるんで」

「ア、左様か、今少し聞たいことがあつたのに」

「旦那へ、私ア此方の馬丁です、お邸の事に付いて、尋ねてへと言ふ譯なら、お高どんより私の方が何でも好く知つて居ますア」

「ム、御當家の馬丁さんでしたか、私は九州から、今度上京を致した碧海昌純と申す者で」

「ヤア碧海昌純さんと仰しやるからア、儘か昌介さんのお兄さんで」

「では昌介を御存じか」

「知らなくて何うしませう、私ア昌介さんの事に付いて、何んなに骨を折つたか知れませ
んせ、何しろ自宅の旦那や御隠居さんは、昌介さんをお暗に嫌つて、それ乞兒書生が来や
アがつた、打のめせ追立ろつて、外の馬丁や、車夫に言ひ付けて、酷い目に逢はす毎、私ア
何時も昌介さんを庇陰て、何が何てへ、書生々と輕蔑するな、家に歸りやア若旦那と、
都々一にせへ歌つてあるのを、手前たちア知らねへのか、サア昌介さんが何時乞兒をしな
すつた、指でもさして見やアがれ、己が相手だてへんが、昌介さんを助けちやア、下宿ま
で送つたものです、處が可愛さうに昌介さんは、大旦那を當にして、遙々出て来なすつた
んだから、下宿料だつてありやアしません、すると下宿屋なんてへ奴ア、無法に催促しや
がつて、何でも大風大雨に、大雷、何うする事も出来ねへ様な晩に、サア唯つた今出て
行て貰ひませう、夫が否なら下宿料の滞りを皆拂へ、イ、ヤ一晚の事はさて置いて、一時
間でも待たれねへつて、因業な事を吐すんで、とうとう私か十圓許り、立替た事もありま

したつけ」

「夫は、御親切忝けない、そんな事も常人から、一向申して遣はさんので、お禮状も差
上ず、相済まん事でした」

紳士は五圓紙幣一枚包んで。

「弟が拜借の金子、早速お返し申したいが、旅中心に任せません、是はほんのお禮の證
何れ拜借の分は歸宅の上、送る事に致しますから、暫く御猶豫を願ひたい」

「お氣の毒さまですねへ、ぢやア折角の思召、頂いて置ませうよ」

「さて弟の事です、只今は何處に居りませうか、御存じならば承はりたいが」

「昌介さんには私の方でも、いろく用があるんで、疾から尋ねて居ますがね、何處へ
行て仕舞なすつたか、全然分らねへんです」

「ハ、ア、御存じはない、誰も弟の事に就て、好く知つた人はありますまいか、光子さ
んにお尋ねしたら、よも知れぬ事はあるまいが、お目に掛られねば仕方もない」

「そりやア駄目です、お嬢さまに伺つても、知れつこはありません」

「併し桑田の一家の中、光子さんばかりは、昌介にも親切で」

「夫が左様ぢやねへんです」

「でも弟からの文通で、光子さんばかりは、死だお父さんの遺言に基き、他まで弟と夫婦になる、了簡といふ事も、承知して居る譯で」

「夫が皆な嘘なんで、初の中こそ義理を立て、二人一處に暮すなら、深山の奥の佗住居、何な苦勞も厭はねへッて、道行とまで洒落込だもの、九尺二間の裏店で、貧乏世帯を張た氣持ア、餘まり有難くもねへんで、いの一にお嬢さまが、昌介さんに愛想を盡し、實ア是々の所に居るから、引戻して下さいてへんで、知らしたのもお嬢さま」

「イヤ〜光子さんに限り、決して其様心はない筈」

「愛想を盡かしたと言ふ證據にやア、茲二三日の中にお嬢さまは、御婚禮があります世」

「ナニ光子さんが婚禮をする」

「菅井長四郎と言つて、御隠居さんの甥に當る、立派な婿さんが出来ましたのさ」

紳士は涙振落しつゝ。

「夫では私が參つたのに、逢ぬと言ふのも無理はない、左程精神の腐り果た、桑田一家の人々に重ねて逢ふ用もない」

勢あらく罵りつゝ、立歸らうとする時、庭先の木戸引明けて、追絶つた光子。

「貴君暫らくお待ちなすつて」

「ヤア光子さんだな、お放しなさい、エ、お放しなさい」

突放して驅出す紳士、またも追行かうとする後から、東吉ひしと抱留めて

「お嬢さま、お廢なさいまし、見ツとせねへちやア御座いませんか」

(三十五)

如くものもなしと言ふ春の夜のおぼろ月は、何の邊に出て居るやら、脇目も觸らず先掛りになつて只管道を急ぐ婦人が、今三圍の方から枕橋へ掛らうとする時、欄干を立離れて、行違つた婦人と、二間許り行過て、言合したしやうに振返り、雙方顔を見合した。

「美禰ぢやアないかへ」

「あれマアお嬢さま、貴嬢お一人、何だつて夜分斯んな處へ居らしたんで御座います」
「是にはいろく譯もあるが、汝はまた何だつて、斯な處へ來て居るのかへ、もう病氣は癒くなつたの」

「ハイ」

「夫ぢやア向島へ歸る心算で」

「ハイ」

「アラ否な美禰だよ、汝泣いて居るぢやアないか」

「ハイ」

「何を聞いても、ハイくぢやア分らないが、汝斯しておくれ、私は今夜馬喰町の宿屋まで行くんだから、萬望一所に行ておくれ、途中いろく話もしたいから」

「ハイ」

「サア早く實は別荘から竊りと出掛たんで、若し誰か追てでも來ると面倒だから」
美禰は急ふに前後を見廻し。

「夫ぢやアお嬢さま、向河岸へ參りませう、此方は人通が少くて、見附かり易う御座いますから」

「夫ぢやア急いで、あれ美禰や、そんなに早くは歩かれなくてよ、ア、其位、私は久しく外出をしないから、呼吸切がして困ります、マア夫は左様と、日外の使の事は」

「お嬢さま、私ば何う致しませう、だから今晚も寧ろその事、死んでお詫を致さうかと、存じたんで御座います」

光子は急に立留り、美禰が手首をぐつと押へて。

「美禰、何うしたの」

「お嬢さま御免遊ばせ、私はマア飛んだ災難に遭ひまして、貴嬢にお目に掛られないので御座います」

「災難ツて、何うしたの、泣いて居ては仕方がないから、委しく話をして御覽よ」

「彼の日お嬢さまの御用を承つて、御別荘を出掛ますと、もうちやんとお目附けが、待つて居るんで御座いますよ、馬丁の東吉が……、憎らしいぢやア御座いませんか、西と言へ

ば西、東と言へば東、私の参る方へ、何處までも附纏ひ、欺しても賺しても、離れないんで御座いますもの」

「左様かへ意地の悪いねへ」

「とう／＼番町のお邸まで、御用もないに参りまして、彼方で少しの隙を見て、私は

騙出しました」

「御徒士町へ行って」

「参る事は参りましたが、もう碧海さんは居らつしやらないんで御座いますよ」

「エ、お引越になつて、あの何方へ」

「夫が貴嬢分りません、彼家のおかみさんのお話には、何でも遠い處へ、お越になるかも知れない、若しお嬢さまからお使ひでもあつたなら、お約束の事は、儘かに覚えて居りますと、傳へて置いて下さいつて、左様仰しやつたさうで御座います」

「約束の事は覚えて居るつて、ア、有難い、美禰、夫だけ聞けばもう澤山」

「お嬢さま是から先が大變なんで御座います」

子

實

今度はまた美禰の方で、光子の手を押へながら、ほろ／＼と涙を溢した。

「碧海さんが何かなすつて」

「イ、エ碧海さんは夫ツきり、まだ何方へ居らしたとも、知れないんで御座いますすが歸り懸に私は、盗賊に逢ひまして、殺されたんで御座います、殺されたと申しちやア、可笑しいやうに聞えませうが、突然後から私に、抱付いた者が御座います、オヤまた東吉だと思ひ詰て、東吉さんお廢止なさいと言ふ中に、何だか妙な氣持になつて、往來に仆れた跡は、死んで居たんで御座います、お巡査さんやお醫師さまに、いろ／＼手を盡して頂いて、漸と蘇へりました時は、何故呼吸を吹き返したかと思つて、實に口惜う御座いましたと」顔に袖を當て泣く。

「マア、悪い事でもされたのかへ」

「ナニ左様ぢやア御座いませぬ、あの貴嬢の大事な指輪を、盗まれたんで御座います、私は宅へ参つて、兄に話を致した上、懇意な刑事さんや巡査さんに、探偵を頼みましたが、今に手掛りも御座いませぬから、兄まで私を疑ひまして、盗まれたなんて言つて其實汝

子

實

情夫でも拵へて、巻上られたんぢやアないかと言つて、否に申すんで御座います、夫で
を私は、枕橋から身を投て、死んで仕舞うかと存じました」
「オホ、大切な人の生命と、高の知れた指輪一つと、取換て何しやう、美禰や、心配しな
いで好ことよ、夫より汝は死んだ氣で、私の力になつておくれ、私はもう是つさり、宅へ
は歸られないかも知れない」

(三十六)

光子は美禰に向つて、委しい事情を説き明した。大澤秀行と言ふ極めて怪しい人物が、別
荘に入込み、桑田一家を攪亂さうとして居る事、繼母仲子は健三の同意を得て、甥の長四
郎を婿に取れと、無理無躰に迫る事、此の日碧海昌純が、弟の事を氣遣ひ、遙々の處を出
て来て、別荘に尋ねたのを、誰も逢ずに歸した事まで、落もなく話した後。
「ねへ美禰、好くマア考へて見ておくれ、左様いふ怖ろしい家の中に、私は誰一人味方も
なく、罪人同様に見張をされて、今が日まで送つて來たが、何の道私は桑田家に居て、操

を守る事は出來ない、今夜少しの隙を見て、別荘を逃出したのは、碧海のお兄上さんにお目
に掛つて、私の心をお話し申した上、出來る事ならお故郷の方へ、連れて行て頂きたいと、願
つて見る積です、夫が若し出來なくても、私は當分桑田家に、歸らうとは思はない、是か
ら馬喰町の宿屋に、お兄上さんをお尋ね申して、旨く相談が調へば好し、調はなかつたら
仕方がない、美禰や私を汝の宅に、二三日庇陰ておくれでないか」

「マア、驚きましたねへ、ほんの僅かばかりの間に、何たら變りやうで御座います、其
大澤さんとやら、何だつて其様人が、入り込んだので御座います、ほんとうに憎らしい御
隠居様、あのいけ好ない菅井さんを、お嬢さまの婿さんに、夫れをあの旦那さまで、御
承知遊ばしたんで御座いますか、碧海さんはお可愛さうにねへ、お故郷からお兄上さんが
わざわざお出遊ばしたのに、何誰もお逢ひにならないで、嗚お腹が立つたで御座います
う」

「大變怒つてお歸りになつたから、私はお氣の毒で仕方がない」

「お嬢さま、必ずお案じ遊ばします、二三日は愚か一年でも二年でも、必然お庇陰申し

「私どもの兄は、衆々お話し申し上げた通り、夫れはく、任侠で、人さまの事でも、身に引受たとなれば、命にかけて致す氣象、兄さん、私が御奉公申すお邸だから、一度御挨拶に出しておくれと申しても、己等ア否だ、妹の縁に喰付て、大金持の評判の、桑田家に取入るの、胡麻を摺るのと言れちやア、忌入ましいなぞと申して、とうく御挨拶にも出来ない様な、人間で御座いますから、今お嬢さまをお連申して、此の譯を話しますと、夫こそ自分で出来るだけの、お世話は必定致します、其の代りお嬢さま、實に喫驚遊ばす様な、汚穢家で御座いますよ、職は縫箔で、随分評判の好い腕前、なかく働さも御座います、生れ付てのお世話好き、誰の事でも、オイそれと引受ますから、何時も貧乏でびーびー申して居りますがお嬢さまお一人位は、何なにも致します、ナニ貴嬢のお爲なら私も藝妓にならうと、娼妓にならうと、少とも厭やア致しません」

「オホ、汝にそんな事をして貰はなくても、私だつて自分一人、食て行く位の事は、奉公しても出来やうぢやアないか」

「何しろ碧海さんのお兄さまと、お故郷へお出遊ばすより、御不自由でも私どもへ、いらしつて頂戴な、ねお嬢様」

「私も不馴な處へ行くより、當方に居たいとは思ふけれど、マアく夫はお目に掛つてお話しをして見た上、何方とか極ませう」

「そんならお嬢さま、此の邊から電車に乗て、早く馬喰町に参りませう」

碧海昌純が名刺の裏に、鉛筆で記してあつた、馬喰町の旅人宿、相模屋を尋ね當て、先づ美禰をもつて問はせた處、其の客人は今夕既に出立したと言ふ事で、光子は非常に落膽したが美禰は却つて大喜び。

「マアく是で安心致しました、サア私どもへお出遊ばせ」

(三十七)

美禰が兄は玉屋秀三郎と言つて、今年恰度四十になる、ちやきくの江戸ツ子、家は淺草俵町で、抜路次の中にある、

「お嬢さま、お危なう御座います、溝板ががた付ますから、成るだけ側の方をお通り遊

ばせ、私お手を引きませうか」

兄が家の格子先まで、漸く降り着いた處、家中は何やら大騒ぎ。

「アレアア折の悪い夫婦喧嘩をして居るんで御座いませう、滅多に斯んな事は御座いませ

んのに」

流石に入りかねて居ると、自宅では兄の玉秀が、例にない怒りの聲で。

「だから言はねへ事ぢやアねへ、己の留守は何處へも出さな、若し強て出ると言ふなら、

三公でも米公でも附けて遣れと言つたのに、……、彼奴も己の妹だ、よもや御主人の

品物を、盗まれたとごまかして、汝が懐中につくねる様な、汚ねへ精神は持つめへ」と、思

ひ込んぢやア居たもの、今朝探偵の米田に逢た時、秀さん、斯んな事を言つちやア濟ね

へが、魔薬を用ひて盗賊を、しやうと言ふ位の奴は、左様たんとありやアしねへ、其上汝

の妹が、そんな價高へ指輪を持つて、使に行つたと言ふ事を知つてるものも一人か二人、

精々三日も調べて見りやア、大抵當りが付く筈だ、處でさつはり分らねへ、此上ながら私

の方も充分骨は折つて見るが、お美禰坊も年齢だから、若しや情夫でも拵へて、義理づ

めの金の無心、否と言へねへ處から、主人の品を渡して置いて、盗賊に取られたと、言ふ

様な偽計は、随分世間に好くある奴だ、マアお美禰坊に限つて、そんな事アなからうが、

氣を附けて見るが好いと、否に言はれて癪に障り、忌へましいが一杯で、歸るが早へか

お美禰を呼び、汝御主人の指輪を、盗まれたと言てるが、全く夫に違へねへか、若し情夫

でも拵へて、悪い了簡を出しやアしねへか、そんな所爲でもしやうもんなら活しちやア置

かねへぞと、手厳しく言つた時、お美禰はほろ／＼と涙を溢して、兄さん、私もお前さん

の妹ぢやアないか、自分で御主人の物を盗んで、盗賊に取られたなぞと、そんな賤しい恥

かしい、精神は持つてやしないワ、若し情夫を拵へてお金が入れば入るやうに、兄さんに

頼みます、外の人なら知らない事、兄さんから今の様な疑を受やうとは、夢にも思つて居

なかつた、口惜しいと言つて泣き出した時ア、己等も涙がくんで出た、お美禰有難へ、夫

でこそ己の妹だ、ナニニ八百兩が千兩でも、二三年みつちりと、己等が腕によりを掛りや

ア、必然御主人に償つてやる、安心しろと言ひたかつたが、眞逆左様も言へねへんで、マア

夫なら夫で好いッて、曖昧で済ましたもの、彼女が腹になつて見な、何の位悔しかつた

一四六
 か知れやアしねへ、寧ろ死んで仕舞つた方が、好いと云ふ様な了簡にならねへもんでねへ、だから好く氣を附けろと、彼れ程言つて置いたのに、若し身でも投られて見ろ、己等が殺したも同じ事だ」
 女房お豊も涙聲。

「良人さんの言ひやうが、平生になく殿しかつたから、美禰ちゃんもしみじみ悲しく、思つて居る様でした、だから良人さんの出なすつた跡でも、私はいろく宥めたんです」
 「宥めたつて何したつて死で仕舞つちやア仕様がねへ、三公は向島の桑田さんへ行たんだな、米公は番町のお邸、何方にも居ねへか、横町の菊坊の處でもなし、髪結でもなし、もうく何うしたつて、死んで仕舞つたに違へねへ、三公提灯を點火な、是から死骸を探しに行くんだ」

お美禰は光子をさしまねる。

「あの通りがらくした兄なんぞ御座いますよ」
 貫ひ泣きをして居る光子が手を執て格子を開き、わざとろくしい聲をはり上げ。

「サア〜此方へお入り遊ばせ」

(三十八)

美禰が聲を聞くや否や、玉秀夫婦も弟子の二人も嬉しさに飛んで出た。

「お美禰か、有難へ、好く歸つて来てくれた」

「マア美禰ちゃん、何處へ行てたの、自宅ちやア大騒ぎだつてよ」

「何うも御心配掛て濟みませんでした、サアお嬢さま、早くお入り遊ばしませ」

「オヤ何誰かお客さま」

「姉さん、今夜妙な事で、お邸のお嬢様にお目に掛つたんですが、いろいろ仔細があつて、自宅へお供して来ました」

「エ、桑田のお嬢様が、左様か、マア斯んな薄汚ねへ處へ、好く入しつて下すつた、エ、もう何も此の通り、亂暴な住居で御座いますが、話の種だと思召て……、から何も人間の宅ちやア御座いません」

八疊の座敷から、六疊の次の間まで、取散してある仕事を片付け、夫婦は光子を上座に誘ひ、丁寧に辭儀さして。

「先づ始めまして、私は此の美禰の兄、秀三郎で御座います、美禰が永々お世話様になりまして、何時からか御挨拶に、伺ふ筈で御座いましたが、ツイ手前にかまけまして、御無禮を致しました、美禰は一方ならない、御厚情を蒙りまして、有難い事で御座います」

「イーエ何うしまして 私こそいろ／＼とお世話になります」

「恐れ入ります、是さ米、そんなお茶を差上たつて、召あがるものか、お美禰、汝何とか好様に」

「兄さん、マアお茶も何にも差上ないで好事よ、夫より兄さんに少しも早く、話したい事がありますのさ」

「マア汝の話なんか跡でも好やな、折角マアお嬢様が入らして下さつたのに」

「お嬢様のお身の上に付いて、兄さんに話があるのよ」

「左様、ぢやア早く話すが好い」

「實はねへ、私もお嬢さまのお使ひに行た途中、あんな酷い目に逢つて、兄さんにまで痛くない腹を探れたから、寧ろ死で申譯と、覺悟を極めて家を出たが、枕橋で身を投げやうとする時、思ひ掛ないお嬢様に、ひよつくりお目に掛つたのも、神さまのお引合せ、お可愛さうにお嬢さまは、いろ／＼お困り遊ばす理由があつて、何うしても今の儘、お邸に落付いて、お出遊ばす事が出来ないのです、夫で今夜御別荘を、そつとお立退き遊ばして田舎へでも行かうかと、お考へになつた處へ、私がお目に掛つて見ると、自分が死ぬ處ぢやアないでせう」

「ム、左様とも／＼」

「だから私は何の様な、苦しい辛い思ひをしても、當分お嬢さまを安樂に、お庇陰申したいと、丁簡を極めました」

玉秀は横手を拍て。

「お美禰好く言つた、夫れでこそ己の妹だ、何も汝が苦しい辛へ思ひをするにやア及ばねへ、汝の爲に御主人様なら、己等の爲にも御主人様だ、貧乏はして居たつて、お嬢様お一

人、お庇陰申す事の出来ねへ程、けち臭へ玉秀でもなからうちやアねへか、モシお嬢様、御大家にお育ちなすつた、貴嬢がたから御覽になれば、乞兒の様な生計でも、少しお馴になりますと、左様々々馬鹿にしたものぢやア御座いません、貧乏人は貧乏人で、また言ふに言はれぬ、樂みが御座いますのさ」

「誠にお氣の毒ですが、何か少しばかりの間」

「五年でも十年でも、御緩りなさいまし、此處に居りますのが、豊と申して私の家内、あの二人の野郎は、弟子なんで御座います、三公も米公も、今聞か通りの譯で、此のお嬢さまは己等姉妹の、大切な御主人様だ、分つたか其の積で居なよ」

「兄さん、若しお邸からお嬢様を尋ねてお出になるかも知れない、何うか皆なに口留をして置いて下さい」

「オツと合點、何んな人が尋ねても、必ず喋舌る事ア出来ねへぞ」

折から表に人の足音、玉秀は自分で立つて、間の袂をびつしやり閉切り。

「誰か遣つて来た様だ、静かに〜」

(三十九)

玉秀が飛んで出た時、格子の外に提灯翳して。

「玉屋さんは此方ですね」

「ハイ玉秀は手前ですが、何方からお出になりました」

格子戸をがらりと明けて、入つて来たのは例の東吉。

「へエこりや初めてお目に掛りました、私ア桑田家の馬丁東吉と言つて、此方のお美禰さんにやア、いろいろお世話になるものです」

「ア、左様ですかへ、番町の桑田さんの、大方美禰も御厄介になつたでせう、彼女も斯んなに永え間、お暇を頂いちやア濟まねへんで、大きに當人も氣を揉んで居ますが、まだ何うもぶら付いて、元の體になられませんか、夫に今夜は早くから家を驅出したつきり歸らねへんで、唯つた今まで大騒ぎ、夫に付いちやアお邸へも、先刻伺ひに出しました、漸との事で行方が知れて、安心をいたしましたのさ、大かた汝さんのお出なすつたのも何

でせう、美禰の事を御心配下すつて、遠方わさく、濟みませんでしたねへ」

「ナニマアお美禰さんの事も、お美禰さんの事だが、私の方でも少ばかり、お聞申してへ事があるんで、外でもありません、お邸のお嬢さまが、お出になつて居ませうねへ、何か東吉がお迎ひに出ましたから、早くお歸りになるやう、左様申上げておくんせへ」

「ナ、何です、お邸のお嬢さまが、何處へお出になりましたねへ」

「へん、何もそんなに真面目くさつて、偽を切らなくても好い、夫とも匿さうと言なさるのかへ」

「い、ア汝さんのお話は、何だか全然分りませんねへ」

「分らなきやア分らねへで好い、餘計な口を利かねへで、桑田のお嬢様を渡しやア好んだ」

「イヤ愈私にやア分らない、汝さんの口振だと、桑田家のお嬢さまが、美禰でも尋ねて

お出になつた、夫を私が汝さんに、匿すとも言ふやうな、何だか怪しな口の利やう、縦

令お邸のお嬢さまが、私の處へ行くと言つてお出掛なすつたか知らねへが、まだお出はあ

りません、何もお越しになつたものを、匿す譯はねへでせう」

「匿す譯のねへのに、否に匿すから忌めへましいんだ、此方ちやア證據を押せへて、是だ

けの事を言ふんだ、オイ親方、こりやア何だ」

東吉は光子が下駄の片片を取上て、玉屋が目前にくつと突付け。

「見覚えのある此の下駄が、何よりも確かな證據だ」

玉秀はぎよつとしたが何氣なく嘲笑ひ。

「下駄が證據、フン珍らしい物が證據になつた、而も是は嗅の履物、貧乏人の女房でも、

矢張道を歩くにやア、人並らしい下駄も履きます」

「臺や鼻緒は言ふに及ばず古び加減までそっくり其の儘、誰が何と言つたつて、お嬢さま

のに違へねへんだ、夫とも強て偽をきりやア、仕方がねへ家捜した」

飛上る東吉を、眞逆さまに突落し、二尺四方の角火鉢に、突ッ込んであつた焼ごてを振裂

して腕付け。

「優しく出りやア圖に乗つて、何だ家捜し、サア一足でも踏込んで見ろ、人間並の作法も知らねへ、汝等が様な我利々々亡者は、片ッ端から焼ごて當て、心の敵を伸して遣るんだ」

玉秀が勢に、東吉は辟易して、こそ〜と表に驅出し。

「出さなきやア出さねへでも好いや、此方にやちやんと出させる方があらう、今に何するか覚えて居やがれ」

言捨て立去た。

「ハ、ハ、ハ、先づ追返して遣りました、ナーニ私の方でお引受申したからは、假令誰が參らうと、御心配にやア及びません」

(四十)

王秀は東吉を一旦威付けて歸したもの、所詮此儘では濟むまい、明日にも何な談判を、持込まれるかと思つたので、自分が平生愛顧になる、店の隠居に事情を明し、根岸の別荘を借受て、光子と美禰を此處に移した。

光子は玉秀に庇陰はれて、一月餘り何事もなく、朝夕庭に音訪て来る、鶯を友として、長閑に其の日を送つたが、或時光子は帯から衣服まで、そっくり美禰のを借受て、顔は頭巾

に押包み、例の野島かめを訪ふた。
野島は今恰ど家に歸つて、夕飯を仕舞ひ、跡片附をして居た處へ、光子の聲を聞附けて慌しく驅出した。

「マアお嬢さまちやア御座いませんか、好く居らつしつて下さいました、私も唯だ今番町に伺つて、歸つたばかりで御座います」

野島は光子をお馴染の、奥座敷に誘なふ中も。

「先々月で御座いましたか、お邸の馬丁で、東吉さんとか申す人が、私ともへ尋ねて參つて、桑田のお嬢さまがまた此處へお越になつて居る筈だ、サア早く出せと申して、騒ぐんで御座いますよ、イーエお出になりません、外をお探しなさいと申すと、夫は〜亂暴にも、其邊中家探して、歸つたもので御座います、お可愛さうにお嬢さまは、何處へお出遊ばしたか、嬢兒ちやんは何遊ばしたかと、お案じ申して居ります中、今朝程碧海さんから、お消息が御座いました」

「エ、碧海さんからお消息が」

「早くお目に掛たいと存じても、何處に居らつしやるか分りませんから、唯何となく番町のお邸へ、伺つたんで御座います、サア早く御覽遊ばせ」

帯の間から出して渡す手紙、取る手も遅しと封切つて、二度までも展讀した。

「お嬢さま、碧海さんはお達者で御座いませう、表書に横文字のある模様では大方西洋へ居らしたんで御座いませうねへ」

「左様ですよ、とうとう亞米利加へ參つたんです、叔母さん喜んで下さい、參るまでは大変な、心配だつたさうですが、香港から同船をした、亞米利加人と懸意になつて、是非其人が自分の會社に、當分勤めてくれると言つて、船中から社員あしらい、亞米利加へ着いた上でも其人の家に居て、會社へ通勤をする事になり、學問をする暇もあるから、必ず心配せぬ様にと、くれぐれ言つて參りました、夫から今度は叔母さんに、別段お手紙を差上ないが、萬望宜しく申上げてと、書添て御座います」

「マア〜夫で御安心で御座います、二三年もお待遊ばしたら、碧海さんも立派になつて

お歸り遊ばすで御座いませう、左様して今お嬢さまは、何處に居らつしやるんで御座います」

光子は碧海と縁を切り、他へ嫁入りを強られるので、自分の邸に身を置きかね、今は根岸に潜む事情を、掻い摘まんで説き明かした。

「左様いふ今の身の上ですから、迂闊外にも出られません、今日はもう直に歸つて、美禰にも安心させませう、お序がありましたら、萬望根岸へお出下さい、何時も女中と二人きり夫は〜淋しい事です」

「だつてマア今少し、お宜しいぢやア御座いませんか、お歸りは私が、お送り申て參りますよ」

光子は少しも早く立歸り美禰にも話して喜ばしいから、野島が留るのを振切りて、其儘根岸へ歸る途中、上野の公園を抜けやうとしたが、東照宮の少し手前で、不圖小兒の泣聲を聞き、思はず足を踏み止めた。

(四十一)

見れば十二二の小柄な守子が、小児を脊中に括り附け、黄い聲を張上て、頻りに守唄を唄ひながら綾さうとして居る様子。

「可愛さうに、何故あんなに泣くんたらう、まだまるで嬰兒の聲だ」

見返りながら通過したが、唯何となく後塚引戻される心地がした。

遂に光子は立戻つて、彼の兒守の傍に進み、會釋しながら言葉を掛けた。

「大層お泣なさいますねへ、何なすつたんです」

兒守の女も好々困つて居たと見え、眞赤な顔に額際から、流れ掛る汗を拭つ、殆んど自分も泣出しさうな聲をして。

「お乳母どんが下つて、お乳がないから泣くんですの」

光子も聲を曇らして。

「オヤ、お母さんは何なすつて」

子

實

「貰ッひ子で眞實のお母さんは居ないのよ」

「マアお可愛さうに、夫ぢやア牛の乳でも、育ててお出なさるんですか」

「自宅の旦那も御新造さんも、大變可愛がつて居なさるんですよ、夫で好お乳母どんを雇

つて、昨日まで居たんですが、田舎のお父さんが病患と言つて、下つて仕舞つたもんだか

ら、代りのお乳母どんを捜す間、牛の乳を呑まさうとしても、なか／＼呑み付かないんで

すもの」

兒守の話の聞く中に、光子はお負絆纏の、襟の間に手を入れて、泣き入る小兒の頭を撫で

一心に顔を見詰めた。

「此のお兒は坊ちゃんですか」

「イーエあの嬢ツちゃん」

「私がお乳を上げませう、お願ひだから鳥渡私に抱して頂戴」

瀧のやうに涙の流れる、光子が顔をじつと見たまゝ、兒守は何とも答へなんだ。

「ね、後生だから、鳥渡で好から」

「だつて自宅へ歸つた時、私が小言をいわれます、悪いお乳を貰つて呑と、小兒の爲にならなから、何な方のお乳でも、貰う事は出来ないツて、左様言てあるんですもの」

「オ、左様でせうとも、悪いお乳はお子さんの爲に好くないと言ふ事です、けれども私のお乳はね、お醫師さまに見て頂いても、大層好いといふ事です」

兒守は四邊を見廻した、光子も四方を見廻した。

「あの斯うしませう、権現様の境内へ入つて、そつとお乳を上げませう」

小兒は頻りに泣き立る、光子からは頼まれて、兒守も困り切た餘り、遂に其意に従つた。

「サアもう此處なら、誰も見る人はありません」

光子小兒を抱取つて、懷中を推明けると、小兒は忽ち泣く音を留め、涙に汚れた顔すり付けて、乳房にすがりたいけさ、光子はひしと抱締めて、暫し涙を絞つて居た。

「此お兒の名は何と言ひます」

「菊ちゃん」

「さいちやん」

「お菊さんです」

「左様、好いお名なこと、何時もこんなに喧しいんですか」

「イーエ、優しいお子さんよ」

「汝さん可愛くて」

兒守は莞爾として首肯した。

「可愛がつてお遣んなさい、眞實のお母さんもないと言へば、全く不便なお子だから兒守は嬰兒の顔ちよつと覗いて。」

「アラ否だ、寝て仕舞てよ」

「お乳を呑んで安心して、好氣持になつたんでせう、お乳母どんは何日來ますか」

「自宅の旦那は狂人の様になつて、昨夜から今日まで、お乳母どんを捜して居ても、好人がないんだもの」

「マア困つたもんですねへ、お宅は何方」

「廣小路の澤田といふ洋服屋です」

「廣小路の澤田さん、左様ですか、外にお子さんはありませんか」

「エ、此の子ばかり」

兒守は光子が傍に立つて、早く受取たい容子であつた。

(四十二)

光子が歸りの遅いのを氣遣つて、美禰は心も心ならず、始終表へ驅出しては、また家中へ入つたが、好く／＼堪兼たと見て、迎ひに行かうと決心した。先づ裏表の戸締をして、着物を着かへやうとする時門の戸がガラリと開た。帯半分締掛て玄關に驅出せば。

「美禰、歸つたよ」

「オヤお歸り遊ばせ、餘りお歸りが遅いので、若しや途中悪い人にでも、お逢遊ばしはしないかと、何なに心配致しましたらう、夫で今から私は、お迎ひに参らうと、存じて居たんで御座います」

「心配をさせて濟まなかつたねへ、併し美禰や喜んでおくれ、碧海さんからお手紙が来て

居たのよ」

「オヤマア左様で御座いましたか」

「亞米利加に居らして、大變御都合も好さうよ」

「アラ亞米利加に、左様で御座いますか」

「私が願つた通りになつて、斯んな嬉しい事はないの」

「ほんとうにお嬉しう御座いませうね」

「お金も何にもないのに、お出掛になつたから、随分香港邊までは、御難儀をなすつた様だが、さる亞米利加の紳士と、船中から悪意になつて、是非其の方が自分の會社に、勤めて下さいと勧めたさうで、彼地へお着になつた後も、其方の家に居て、毎日會社へ通ふ暇には何んな勉強でも出来るから、必ず心配しないやうにと、嬉しい事が言つて來ました」
「マア、何といふ結構な事で御座いませう、傭費嬢も御安心遊ばしましたらう、明日は赤の御飯でも炊て、お祝を致しませう、兄も何んなに喜ぶ事が知れません」
「早速郵便でも、知らして上る事にしやうねへ」

「ナニ明日邊は参りますよ、サア、御飯に致しませう」

「まだ私はお腹が好から、もそつと落附いてから喰さしておくれ、美禰や、まだ嬉しい事があつてよ」

「オヤ大變で御座いますね」

「私はお乳が張つて、毎日困つて居たでせう」

「貴嬢がお産を遊ばした事は、さつぱり存じなかつたんで御座いますよ」

「夫は皆に匿して居たから」

「嬰兒ちゃんは何う遊ばしたんで御座います、此處にお出遊ばすと、私は何んなにも、お世話致しまするものを、爾して嬰兒ちゃんの居らつしやる先は、お分りになりませんか、夫が知れさへ致すと、兄から何とでも話をして、是非貰ひ返す事に、相談を致しませうが」

光子は急に打萎れて、

「假令今更在家が知れても、先方で返す事は、否だと言ふかも知れません」

「貴嬢嬉しい事と仰しやるのは」

「御徒士町から歩る途中、上野の公園を抜て來ると、東照宮の少し手前で、年齢十一二の守が、嬰兒を負つて、遊んで居るのを見掛たのよ、何んな小兒か見たいと思つて居ると、假にぎやア泣き出して、守も困つて居るやうだから、立寄つて其の兒を見ると、マア何うだらう、夫が儘かに私の兒なの」

「エ、夫はマア眞實で御座いますか」

「聲を聞いてはつと思つて、顔を見ると愈何うでも、間違ひのない私の兒だから、守にいろ、頼み込んで、お乳を呑まして遣つたんだが、聞けば兩親が大層可愛がつて、好お乳母を附けて置いたのに、昨日親の病氣とやらで、急に下つた處から、お乳がなくて困つて居るとさ」

「マアお可愛さうに、夫れぢやア早速兄に話して、貰ひ返す事に致しませう」

「夫れとなく兄さんから、話して見て貰つても好が、守の話を聞いて見ると、所詮返さうとは言はないだらう、其の上半歳か一年で、親子揃ふ事が出来るなら、何うでもして育てませうが、三年先で一緒になれるか、五年十年経る事か、當もないのに小兒を抱へて、暮

一六六
す事はなかく出来ない、マア夫はお廢止にして、少し私に考へがある、跡でゆつくり相談しませう」

(四十三)

其の翌日も四時頃から、昨日と同じ扮打で、光子は根岸の潜伏家を出掛け、上野公園に彷徨ふたが、果せるから昨日の守は、東照宮の前に立つて、博物館の方を眺め、暗に待受て居る容子であつた。

光子が影を一ト目見るより、守はさも嬉しげに笑ひこぼれて、一直線に進み寄つて。

「今日は」

光子は頭巾被つた儘、笑釋して立寄り、先つもつて脊中を覗けば、早く逢つて下さいと言はんばかり、守は脊中をさし付けた。

「オヤ今日は大層御機嫌が好くて、アレマア笑つて」

同やうに笑ひながら、光子は頻に涙を流した。

「夫人さん、昨日は有難ふ、お蔭で昨夜は優しく、好く眠なさいました」

「マア左様でしたか、好かつた事ねへ、サア〜今日も澤山に、お乳を上ませう」

「私旦那さんに話したのよ」

「オヤ私がお乳を上た事を、旦那さんがお小言仰しやつたでせう」

「叱られるだらうと思つたんです、だけれども旦那さんは叱らないで、左様いふ立派な方のお乳なら、悪い事もないだらう、明日でもまたお逢申したら、好くお所を承つてお出、お禮に出なくちやアならないッて」

「マア〜お小言が出なくて、嬉しい事ねへ、私は此の通りお乳が張て、誠に困つて居るんだから、上ても好いといふ事なら、朝晩私か此處まで来て、お乳を上ませう、而してお乳母どんは」

「昨日も旦那は朝から晩まで、其邊中走つて廻つて、お乳母どんを探して見ても、好い人が居ないんで、今日は朝から横濱の方まで、捜しにお出になつたんですよ、お乳が好くて子煩悩で、愚に世話してくれると、お給金は何程でも、望み次第に出すと言つて、いろん

な新聞に廣告しても、好人がないんですッて」

「お氣の毒さまだことねへ、愈お乳母どんがないといふと、里にでもお遣んなさるか知ら、何もそんなお話はなかつて」

「何んな事があつたつて里には遣らない、里に遣ると小兒の爲に、悪いと言つて居るんです」

「好く〜可愛いものと見えるね」

「エ〜夫は大變と貴姐、此子ゆゑなら身代を打擲つても構はないッて、左様言つて居るんですもの」

「そんな結構な方々に貰はれて、此お子さんはお幸福だわねへ、實の親達が聞いたなら、何様に嬉しい事でせう、アレマア今日は頻に笑つて、また此境内に遣入りませうねへ」

光子は守と連立つて、東照宮の境内に入り、人の往來の最も少い、風かげになる木の根に憩ひ。

「サアお乳を上ませう」

抱取れば嬉しげに、飛々してかちり付き、呑みだけ呑ばすや〜と、眠る小兒の愛らしさ
「もう少し私が抱て眠させて上ませう、姉さんは今の内、體を休めてお置きなさい、此に私が頂いて来た、お菓子が少しばかりあります、サア是でも喰て……姉さんは何歳」

「十二です」

「感心に好く世話をしてお上なさるねへ、お父さんやお母さんは」

「お父さんは去年死去して仕舞つたの」

「オヤマア可愛さうに、夫ぢやアお母さんお一人」

「眞實なお母さんは居ないのよ」

守は涙組で答へた。

「ぢやア織お母さんですか」

守は首肯た儘返つた、好くも似た身の上と、光子は覺えず涙を流した。

光子は小兒に小便をさせ、更にまた乳を吞ませて。

「日が暮さうになつて来たから、今日は是で別れませう、明日の朝は九時頃までに、お連

申して来て下さい」
守が脊中に小兒を返して、光子は根岸に立歸つた。
翌朝は雨が降つて、頗る悪い天氣であつたが、光子は更に厭はない、約束の時間通り、上野
に行つて待受たが、守は十時を過しても見えぬ、十一時の鳴るのを聞いて、光子はすごとく家
に歸つた。

(四十四)

昨日の中に適當な乳母が雇入れられたのか、夫ならば我子の爲、此上もない仕合と、一た
びは喜んだが、最早是きり膝に載せて、愛らしい笑ひ顔を、見る事もならぬと思へば、何
となく悲しくなつた、夫とも今朝は雨が降るから、兩親に留られたのか、若し左様ならば
午後に行つて、逢ふ事が出来るであらうと、我と我を慰めて、根岸の潜伏家に歸つた光子は
前二日に打つて變つて、何だか一向元氣がない。
「お嬢さま、嘸お困り遊ばしたで御座いませう」

「ナニ左様でもなかつたがね、今朝は出て来ないのよ」
「アラアア折角此のお天氣に、彼處まで行らして、何したんで御座いませう、今朝お越
になる事は、知れて居るんぢやア御座いませんか」
「昨日別れて歸る時、明日の朝は九時までに、運つて来て貰うやう、くれぐれ頼んで置いた
のに、出て来ない處を見ると、お乳母が出来たのかも知れない」
「夫なら夫でお断り申さなくちやアなりません」
「兩親が大變に、可愛がつて居るさうだから、此の雨の降るのに、危いと思つて、留めた
のかも知れない」
「夫にしても守だけなりと、上野まで出して、其の譯をお嬢さまに、お断り申さなくちや
ア濟まないで御座いませう」
「午後今一度出掛て見たら、委しい様子が知れませう」
晝飯の膳に向つても、光子は箸を取たまで、さつぱり食も進まなんだ。
「美禰此の時計は遅れて居るねへ」

「何致して、今少し前、午砲にきつかり合しました、左様お嬢さまのやうに、時計ばかり

見詰て居らしつやつても仕方は御座いません」

光子は椽側に出て、空模様を眺めながら。

「美禰やお天氣になりさうよ」

「夫はマア結構で御座います」

言ふ口の下またざつと降り出す雨

「アラ否だ、また降り出してよ」

「何うせ今少し降りません事には、ほんとうのお天氣にならないで御座います」

「仕様がないなへ」

「けれども後には晴りませう」

光子は家に入つて、また時計を眺めやり。

「まだ漸と一時過ぎだねへ」

光子は出たり入つたり、空と時計を交るゝ見て居たが、二時の鳴るのを待受けて。

「美禰、私は今一度行て来るよ」

「アネお嬢さま、餘まりお早いぢやア御座いませんか、何時も四時から行つしやるのに」

「斯うして家に居て見ても、何だか心配で仕様がなから、寧ろ早く出掛ませう」

「アネ、大變に降つて参りました、今少し小降になつてから行つしやいませう」

光子は美禰が言葉に對して、十分間も待つたであらうか。

「サア、小降になつたから出掛ます」

美禰は心中笑ひを忍んで。

「夫ぢやア行ていらつしやいませう」

光子は降りしきる雨を冒して、再び上野公園へ急いだが、無論守は來て居ない、光子も別に怪しまなんだ、夫れならば雨の降るのに、此んな處を彷徨より、平生の時刻まで家に居

て、出て來れば好いものと、理窟を言ふべき場合ではない、光子は家に居て物思ふより

何んな風雨に曝されても、此處に居る方が氣易いのである。

三時半とも思ふ頃。

「アレ夫人が」

一聲叫んで馳奔つたのは、正しく例の守であつたが、何故か今日に限り、小兒を脊中に負ふては居らぬ。

「オヤ嬰子ちゃんは」

守が答へを待たずして、後の方からつかくと、進み出た一人の男は、會釋しながら小腰を屈め。

「エ、私は廣小路の洋服屋澤田と申す者で、先日から毎度はや、御厄介になりました、

小兒の親父で御座います」

光子は迷惑ながら頭巾を取除け。

「オヤ左様で御座いますか、此の姉さんのお話では、お乳母とんが急に下りましたさうで、御お困りで御座いませう」

「イヤもう斯んな弱りました事は御座いませんが、貴嬢のお蔭さまで、實に小兒は助かりました、夫に付まして、今日は少々貴嬢に、お願ひが御座いまして……」

澤田は額を撫で頭をかいて、言出しかねる模様であつた。

(四十五)

澤田は兎角言出しかねたが、漸の事に思切つて。

「實に斯様な失禮な事を願つては相濟ませんが、私を助けると思召して、萬望お聞取を願ひます、實は娘が昨晩から少々風邪でも胃きましたか、大分熱が御座いまして」

光子はハツと驚いて。

「エ、何と仰しやいます、お嬢さんがお風邪を召て」

「早速お醫師に診て頂きました處、先づ昨今の容體では、氣遣ふ程の事もないが、此節小兒に風邪が流行て、少し油断をすと言ふと、腦膜炎や肺炎になるから、成るべく温めて置くやうにと、申されました。臍を潰し、昨晩は夫婦の者が、終夜伽を致しましたが、病氣の加減で御座いますか、兎角牛乳を頂きませんで、是には實に困り切ります、さもない時此の二三日、乳母を雇入れます爲め、いろく奔走致しても、宜しい人が見付りませんで

當惑の折から、今日は店の者の悪意な人まで頼みまして、諸方を尋ね探しましたが、今でまだ見當りません、何とも恐れ入りますが、とても御料切序、私宅までお越を願つに娘にお乳を頂かして遣はしたいと存じますが、如何なもので御座いませうか」

「夫ぢやアあの何ですか、お乳がなくて困るから、お宅へ来てお嬢さんに、お乳を呑まして貰ひたいと仰しやるんで御座いますか」

「餘り恐れ入つた事でお願申上げかねますが、病氣の爲に連れて參つて頂かせます事が出来ませんから、こんな失禮なお願も申上げますやうな譯で」

「マア、夫はお易い御用、遠方と申すでもなし、此處まで出ますも、お宅まで伺ふのも同じ事、夫ぢやア鳥渡お邪魔致して、お乳を上げませう」

「エ、そんならお聞濟下さいますか、夫で小兒も助かります」涙溢さんばかりに喜ぶ。

「マアお可愛さうに、昨夜からお乳もろく／＼と上らないんで御座いますか」
「極少しづ、牛乳は頂かしましたが、何分心配でなりません、お宅を承はつて居りますと私が伺ひまして、是までのお禮も申上げたりお願ひも致したいと、存じまして御座いま

すがお邸が分りませんので、ツイ失禮を致しました」

「何う致しまして、お禮も何も要た事ぢやア御座いませぬ、畢竟自分が乳に張られて、困つて居る處から、お上申すんで御座います」

「誠に有難い事で、何とお禮の申上げやうも御座いませぬ」
光子は澤田に仲はれて、其の家に行て見たが、なか／＼立派な洋服屋で、表掛りは西洋作り、奥は在來の日本建、町家にしては間敷も多く、鳥渡した庭もある。

澤田の妻はお廣と言つて、わさ／＼とした氣分の女、何處から見ても正直さうな、交際好い質の様だ。

澤田の店に入るや否や、光子は奥の座敷から、愛らしい泣き聲を聞いて、疾に精神は彼處に飛んだ、お廣がいろ／＼挨拶するのに、受答へはしたものの、何はさて置き、少しも早く小兒に逢ひたい。

「お嬢ちゃんは何方に居らつしやいます、早くお目に掛つて、お乳をお上げ申ませう」
「貴嬢、唯今連れて參ります、彼方は汚くて不可」

「イーエ何んな處でも私には構ひません」

「でも餘り失禮で御座ますねへ」

澤田は傍から妻に向ひ。

「折角彼仰しやつて下さるから、汚い處でも仕方がない」

「ちやア左様いふ事に願ひませうか、何うも恐れ入りますねへ、唯つた今まで私が、抱て居たんで御座いますが、大層好く眠りましたから、下に寝かして遣りました」

夫婦の者に導かれて、奥の八畳の座敷に行けば、例の守は枕元に附添て、可愛い寝顔を眺めて居る。

(四十六)

小兒は程なく目を覺した、光子は直に抱上て、張詰まつた乳房含ます、小兒はさも樂さうに紐付き、凡そ十分間ばかり餘念なく乳を呑んだ、澤田夫婦は左右から、我子の乳呑む状に見惚て。

「あのマア呑み方は何うでせう、可愛さうにお腹が空て居るものだから」

「是だけ呑ましといて頂たくと、晩までは好だらう、實に有難い事だなア、こんな結構なお乳を飲まして頂だいて」

「鳥渡あれを御覽なさい、笑つて居るぢやアありませんか」

「ム、成る程笑つて居る、久しぶりの笑顔だなア、是さそんなに見惚て居ちやア困る、夫人さまにお茶でもお上げ申す様に」

「お茶も何にも要ません、萬望少しもお構ひなく」

「イヤ何うも困ります、少しでも小兒が何うか致しますといふと、直に自分まで病人のやうになりました」

「左様でせうとも」

光子は會釋して答へながら、嬉し涙は自然に溢れた。

お廣が立つて行た跡、澤田は例の守を呼んで。

「澤山お乳を頂いたから、小便でもすると不可、汝取つて抱て遣んな」

「ナニ宜しう御座いますから、萬望今少しの間、抱して置いて頂きますせう」

「有難いことで御座いますが、若し粗勿でも致しては困ります」

「ザア菊ちゃん私にいらつしやう」

抱取らうとすれば光子に絶る。

「まだお乳を香りたいのでせうから、もう少し此の儘に、姉さんは感心に、好くお世話をしてお上なさいませう」

「何で御座いますか、まだ年が足りませんので」

「なかく左様ぢやア御座いません」

守は譽られた嬉しさ、働さぶり見せる氣か、小兒のおしめかき攪つて甲斐々々敷立去た。

「至つて彼女は小兒が好きで、人間も正直で御座います」

「好人をお雇ひになりました」

「時に夫人さまのお邸は何方さまで御座います」

「宅は淺草の方ですが、此の節根岸の親類に」

「ア、左様で御座いますか、何れ今晚にも、鳥渡お禮に伺ひますが、根岸は何の邊で、失禮ながらお名前は」

「お禮の何のといふ事は、堅くお断り申します、さもないと私は、また上る事が出来ませんから」

「併し斯なにせ世話様になりました、お禮にも伺ひませんでは」

「お願ひですから、萬望そんな事はなさらないで、畢竟先刻もお話し致した通り、乳に張られて困りますから、斯うして呑んで頂きますんで、お禮の何のとおむづかしく、仰しやつて下さいますと、また上りたくても上られません、私のお願はお乳母どんの参りますまで、朝晩ちよいく伺ひますから、何か少しも御遠慮なく、唯お乳を呑んでさへ頂きますと、夫が何より有難いんで御座います」

お廣は茶を入れ菓子を出し。

「漸とお湯が湧きましたから、お茶を一つ差上ります、小兒の病氣で火の消える事も、分らないんで御座いますよ」

「唯今もお断り申した通り、そんなにお構ひ下さいますと、また上る事が出来ません」

「何う致しまして、何にもお構ひ申しません」

「有難い事ぢやアないか、乳母の出来るまで、朝晩に来て、乳を吞まして遣ると仰しやつて下さるんだ」

「マア何うも恐れ入りますねへ、貴姐お子さんは居らつしやいませんか」

「ハイ恰と此のお子位になりませうが、いろく都合が御座いまして、今では手許に居りません」

「マアお氣の毒さまで御座いますねへ」

光子は深く問はれる事を恐れたので。

「サアもう澤山お乳を上げました、宅へ断つて置きますと、今少しお邪魔致すんで御座います、何とも言はないで参りましたから。もうお暇致します」

「マア貴姐今暫く、誠に失禮で御座いますが、唯今御飯を差上ります」

「そんなにして頂くと、明日から伺ふ事が出来ません」

「ナニ貴姐ほんの御飯だけ差上りますので」
強て断つても悪いから、光子は晩飯の馳走になり、急いで根岸へ立歸つた。

(四十七)

光子が根岸の潜伏所に歸つて、委しい話をしやうとする時、誰やら音訪ふ者がある。主従耳を澄した儘、暫し答へもなかつたが。

「アラ野島さんの聲のやうだ」

言ひつゝ光子は自身に立つて、玄關へ出て見ると、果して野島かめであつた。

「マア叔母さんでしたか、好く入らして下さいました、サア此方へ」

「鳥渡此の先まで参りましたから、お寄申したんで御座います」

「何處ぞへお産があつたんですか」

「ナニ左様ぢやア御座いません、少し人に頼まれた事が御座いましてね」
野島かめは光子に導かれて、八疊の座敷に通つた、美禰も出て来て挨拶をする、光子は何

か響應の用意を、美禰に言ひ付ける様子であつたが、野島かめは夫と悟つて。

「お嬢さま、私は直お暇に致しますから、萬望お構ひ遊ばさないで、マア夫れよりも不思議な事が御座いますから、お聞き遊ばせ、私の弟は澤田と申して、上野廣小路の洋服屋で御座いますが、昨晚私どもへ尋ねて参つて、姉さん私は子供の無いのを、平生苦勞にして居ましたが、鬼子母神のお授けで、先頃小兒を貰ひました、まだ漸と三月か四月にしかならないので、早速乳母を雇入れて、大切に育て、居ると、二三日前に其の乳母は、急に暇を取りました、親父が大病で、明日も知れないといふ電報を見ては、引留める譯にも行かず、望の通り暇を出して、代りを探し掛た處が、何分好乳母が見當ないので、誠に困つて居るんです、姉さんは職業が職業だから、若し心當りがあらうも知れないと思つて來ました、如何でせう、給金は何程でも出しますが、好お乳母はありますまいか、怒ツか悪いお乳母に掛るより、牛乳で育てる方が、好いといふ事も聞きましたから、牛乳を吞まし掛ても、兎角嫌つて呑み兼ねます、幸ひ此二日ばかりは、大層御親切な方があつて、守が上野に連れて行くと、わざわざ御自分で出掛て來て、乳を吞まして下さるんで、跡は無理

子

寶

子

寶

にも牛乳を、少しづつ吞して居ますが、何うやら風邪を冒した様子、今の模様では明日になつても、外へ出す事はならず、斯んな困つた事はないから、是非何うか好い乳母を、捜してくれろと頼まれました、夫は嘸お困りだらう、まんざら心當りのない事もないから、明日は早速開合すと申して、弟を返しましたが、今朝出掛に鳥渡寄つて、其の小兒を見ますといふと、マア何で御座いませう儘かに貴姐の嬢ちゃんなんで御座いますよ」

「オヤマア澤田さんは御兄弟ですか」
驚く顔を不審と眺めて。

「貴姐弟を御存じて居らつしやるの」

「叔母さん、上野まで毎日出掛て、お乳を上る女といふのは、何を隠しませう私です」

「マア左様で御座いましたか」

「今日は澤田さんにお目に掛つて、とうとうお宅へ上りました、而して今歸つた處です、叔母さんは彼の子の素性を、お話しになりましたか」

「イ、エ、私も喫驚致して、斯んな可愛いお子さんを、汝何處から貰つたといつて、尋ね

る事は尋ねましたが、お嬢さまのお身の上について、何にも話しやア致しません」

「而してお乳母どんは見付かりましたか」

「ツイ此坂本に先頃お産をした人が御座います、母子とも大層丈夫で、喜んで居ります中八才になる姉嬢が、小便をやるといつて、椽側から落したのが病原で、とうとう脳膜炎で死亡しましたが、其妻さんは子煩悩、主も極好人で御座いますから、話を致して見ましたが里になら取つても宜しい、先様へ参る事は、家の都合で不可と申すんで御座いますよ」
「叔母さん、寧ろ私が暫くの處、お乳母になつて行きませうか知ら」

(四十八)

光子は野島かめを説き、玉秀兄妹の同意を得て、とうとう澤田方の乳母となつた、假に玉秀の妹美禰の名を借受けて

子煩悩の澤田夫婦は、實に非常の喜びで、普通乳母としては取扱はず、客分で厚く遇した、光子の美禰が雇はれるに付き、豫め野島かめを経て、申入れた條件は、左に記す通りであ

つた。

一如何なる來客ありとも執次及び接待に出ざる事

一自身必要の場合の外決して外出をなさざるべき事

澤田夫婦は可愛い小兒に、乳呑ましてさへ貰へば、如何なる條件でも異議はないから、直來て貰う事にした。

光子が住居は一番奥の、最も閑静で日當の好い、六疊の座敷であつた、幸福な小兒は思ひ掛なく、實母の温かい懷中に眠り、豊かな乳に飽事が出来、何時の間にか病氣は直つて、體量もめつきり殖た、小兒が守の脊なに負はれて、上野公園に遊ぶ中は、光子勝手許の世話までするので、澤田夫婦は愈喜び、出来る限り心を盡して、光子の美禰を勞はつた。

澤田夫婦が如何なる度まで、光子の美禰を大事にしたかは、次の一例が證據を示す、澤田が最も愛して居つた、洋服裁縫の職人で、犬地虎吉といふ者がある、澤田夫婦は店の監督金銭出納の事までも、一切彼に任して置いたが、光子の美禰が美形に迷ふて、執念も付け

廻し、揚句の果は脅迫がましい、舉動に及んだ事を、澤田夫婦に聞いて、初は遠廻しに意見をしたが、虎吉なかく思ひ切らぬ、後には面前強意見、欺して見たり見たり、さまざまに訓戒したが、虎吉は其場だけ、充分心に浸たと見えても、光子の美禰が姿を見れば、忽ち前後も打忘れて、目引袖引する處から、澤田は遂に腹を立て、何程商法に差響いても、我兒には代へられぬと言つて、直様虎吉を放逐した、此後も光子の爲に解備された職人は、三四名の多きに及び、澤田の商賈はめつきり減つた、光子は之を氣の毒に思ひ、澤田の爲には恩愛の絆を断つて自分の身を、退かうとまで決心した。今は菊子も乳を離れて、差支ない時期に達した。光子は強て暇を乞ふて、玉秀の許に引取つたが、二日目に驅付けた澤田、聲も泣き噎らして居る菊子を伴ひ、別れた後は夜も晝も、唯々暮つて泣いてばかり、此儘では生命が危ない、夫婦親子を助けると思召し、今暫く御辛抱と、涙ながら頼まれて、再び光子は立戻り、とうとう菊子が九三歳の、誕生まで澤田に居て、日夜我子と親しんだ。

或時澤田に客があつた、二階梯子下て來るのを、光子は障子の硝子を透して、見るともな

く顔を見たが、忽ち慄ひ上る程驚いた、客人を送り立た跡、光子の部屋に音訪れたお廣。

「オヤ菊ちやんは午睡」

「今まで大層御機嫌で御座いましたが、遊び疲れて彼の通り、好くお寝みなさいます、今日はお客さまで御座いましたか」

「否な客人で、氣が塞いで不可せんから、菊坊の顔でも見て、心持を直したいと思つたんです」

「オヤ何處のお客さまで御座います」

「實は宿の兄ですが、もうく何にも斯にも仕様のない人で、宿は毎々酷い目に逢はされて居るんです、夫が貴姐十二三年ぶりに、ふらりと尋ねて参つたんですよ」

「オヤ此方のお兄さんで御座いますか」

「兄弟でありながら、彼も違つた氣質の人が、好く出来たと思ひます、宿は御存じの通り正直一遍、自分は何んなに苦みませうと、人様に少しでも、御迷惑を掛る事は、出来ない質で御座いますが、彼の人は姉弟が、何んな難儀をしやうとも、自分の都合さへ好ければ

構はないといふ心です、野島の姉も御存じの通り、好人で御座いますのに、何して彼な人間が、同じ兄弟に産れましたか』
さも心配さうに説き畢つて、お廣は頻りに歎息した。

(四十九)

硝子越しに大澤秀行が、姿をちらと見て後は、光子一層戒心を加へ、大方部屋に引込んで人目に觸れぬやうにしたが、此後三月許りを經て、澤田夫婦が舉動の上に、著しい變化を來した。

澤田清吉は極温順で、女房のお廣を始め、大勢の奉公人にも、遂に一度叱咤といふものを言つた事のない人、家内の和合して居るのが、何よりも樂みで、而も他に對する自慢であつた。朝は早くから起きて花主廻りをする、暇の時は職人を助けて、自分も裁縫に従事するが、五時限り仕事を休めて、晚餐の膳に何ひ、妻のお廣に相をさせて、二合許も酒を呑むと、忽ち好氣分になつて、面白可笑しい世間話、偶には寄席仕込の端唄都々逸、烏渡器

用に唄つて見たり、お菊を相手に諧謔ちらして、誠に陽氣な質であつたが、此の四五日は晩酌も廢し、夫婦一室に閉ぢ籠もつて、何かひそ／＼話合つては、不時に出たり入つたり、折々は奉公人に向ひ、叱咤を言ふ聲なども聞えて、總てが平生と違つて來た。或夜奉公人も寢靜まつた頃、澤田夫婦は打連て、光子が部屋へ音訪たが、主清吉は見違へる程、顔の色も青醒て、好く／＼心配事のある體に見えた。

『菊坊は眠みましたか』

『ハイもう疾にお寢ました』

『ア、左様ですか、夫ぢやフ恰ど好い、實は少々お話し申したい事があつて、出ましたんで御座います、貴姐にも永い間、一方ならない御厄介、是非マアお禮を申すだけの、身分に仕上たいものと、随分商賣も勉強致して、此の儘一二年も辛抱したなら、貴姐お一人安樂に、お暮しの出来る位は、稼出せぬ事もあるまいと、考へて居りましたのに、イヤもう飛だ失錯を致しまして、何ともハヤ申譯は御座いません』
と言つ、お菊が愛らしい、心地好さうな寝顔を見て、ほろ／＼と涙を溢せば、お廣は良

人になり代り。

「日外兄が参つた事は、貴嬢も御存じで御座いますねへ、彼から後も、ちよいと参つて、何時まで斯な職業をしても、一萬と纏まつた金は、容易に出来やう筈もない、夫より外國貿易を始めると、随分お金が儲かるとか、鑛山を買して遣るとか、いろんな法螺を吹きましても、前々手懲も御座いますから、宿も好加減にあしらつて、何うして私たちは、ほんの職人の手間取で、毎日喰て行くのが一杯、大きな事に手を出すやうな、資本もなければ智慧もないから、矢張り習ひ覺えた職で、其日暮しをした方が安心だと断りました」

「處が其後も絶えず参つて、兎や角申しますものを、何程以前迷惑を掛られたからと言つて、現在兄であつて見ますと、来てくれるなども申されますまい、夫ゆゑ参れば相手になつて、偶には酒の一杯も、出しましたんで御座いますが、何時の間にも私の印判を捺したものが、四五日前或金貸から、私の判の据つた、五千圓の約束手形を、受取に参られて實に吃驚致しました、手跡を見れば慥に兄が、書たのに違ひませんから、早速兄に對面致して、問合しました處が、夫はく平氣なもので、急に五千圓といふ金の、入用が出来

たもの、少し都合が悪いから、餘儀なく汝の判を借て、約束手形に捺して遣つた、其の金も此の頃までには、調ふ見込で居た處が、一向また手に入らぬ、氣の毒ながら何とかして一時間に合して置いてくれろと申すんで御座います、夫は餘り酷いと言へば、イヤ何うも濟まなんだ、此上は仕方がないから、胃判で訴へると、ふてくされの申分、眞逆兄を胃判で、懲役にも致されず、と言つて五千圓の大金、支拂ふ方も御座いませぬから、餘儀なく當分店を畳んで、横濱へ参る事に決心を致しました、彼地へ参つて落附きますと、直に申して上りますが、夫れまでの處王秀さんへ、お歸り下さるやうに願ひます、唯菊坊が歎きませうと、案じられてなりません、悪い叔父を持たが因果、何も致し方は御座いませぬので……、扱はほんの寸志、何ぞ調へてと存じましても、宜しい考へも付きませぬ、何か思召に叶つたものを、お求めを願ひます、甚だ失禮で御座いますが、清吉は奉書に包んで、水引掛た一封を取出し、光子の前に推遣た。